

静岡県文化プログラム推進委員会委託事業

VII 個別事業の詳細評価（濃い評価）

Scale Laboratory

— 目次 —

評価概要（エグゼクティブ・サマリー）	78
1.団体概要 Scale Laboratory（スケイル・ラボラトリー）	78
2.評価目的	78
3.評価設問	78
4.評価概要	78
1.概要	81
1-1. Scale Laboratory.....	81
1-2.評価結果	82
2. Scale Laboratory の活動	83
2-1.経緯	83
2-2.特徴	84
2-3.実施体制	84
2-4.活動地域	85
2-5.活動の背景と課題意識	86
2-6.セオリーオブチェンジ	88
3.活動の軌跡（2015 年 12 月～2020 年 3 月）	89
4.評価結果	91
4-1.評価目的	91
4-2.アートのニーズ	91
4-3.スケラボの活動によって生まれた価値	92
5. 価値を生み出した貢献要素	110
6.今後に向けて	112
付録.評価実施概要	113

本評価について

- ・ 本評価は Scale Laboratory の活動によってもたらされた変化が、地域や個人に対してどのような価値を創出しているのかを明らかにするものである。
- ・ Scale Laboratory の作品の芸術性を評価するものではない。

評価概要（エグゼクティブ・サマリー）

1.団体概要 Scale Laboratory（スケイル・ラボラトリー）

主な活動内容	2016年2月に生まれた Scale Laboratory は、静岡県東部を中心に公演やワークショップ等、様々な形でアートを楽しむ機会を提供するグループである。提供する機会は「観る」ことから「創る」ことまで幅広く、使われなくなった建物の一角やストリート、保育園や学校等、多様な場でアートを繰り広げる。 11人の中心メンバーのうち8人が静岡県東部在住、1名が静岡県出身海外在住、2名が静岡県外在住であり（2020年4月現在）、本業は舞台監督、パーカッショニスト、デザイナー兼アートマネージャー、イラストレーター、印章店経営、NPO職員兼映像作家、舞踏家、お笑い芸人兼美術講師、設計士等様々である。スケラボの活動は中心メンバーに加えて、公演に出演・協力する静岡内外のアーティスト、広報や運営等様々な支援をする地元の人々によって支えられている。
主な活動領域	静岡県東部（沼津市、三島市等）

2.評価目的

本評価はスケラボにかかわる多様なステークホルダーから評価情報を得て、スケラボの活動によって生まれた変化と創出された価値について見える化すること、及び価値の創出に対する貢献要因を抽出することを目的とする。評価結果は、今後のスケラボが活動方針を検討する際の参考情報として、またスケラボの活動の価値を静岡県文化プログラムやその他スケラボをサポートする関係者への発信に活用されることが期待される。

3.評価設問

- (1) スケラボが地域の人たちに提供しているものは何か？
- (2) 地域のアート人材の共創を促進する「仕組み」と「特徴」は何か？

4.評価概要

- (1) スケラボが地域の人たちに提供しているものは何か？

スケラボの中心メンバー及び関係者へのインタビュー、公演の観客へのアンケート、スケラボの発行する文書を通じて得られた評価情報から、スケラボが良質なアートを地域に提供していることに加えて、地域の文化芸術資源の開発、アートに関わるつながりの社会関係資本の構築、地域の魅力化等、多様な価値を創出していることが明らかになった。

①スケラボの特徴的な活動方法により、地域のアーティストやアートに関心の高い人たちの間の共創が促進されている

■スケラボは「音楽」「舞踏」のような決まったジャンルにとらわれず、実験的な企画を展開しているため、様々な分野のアーティストやアートに関心を持つ人を幅広く惹きつけている。また毎回の企画の発案をしたメンバーがすべてを決めることはなく、中心メンバーやその他の人とコン

セプトを共有し、相談しながら具体化していくことが多いため、多様な人たちがそれぞれの力を発揮できる役割を担ってきた。

■スケラボの中心メンバーや協力者が自分の表現方法やスキル、関心分野を持ちよりながら協働することで今までなかったアートの企画を実現している。

②良質なアート体験の機会を提供している

■スケラボの企画には代表の川上氏をはじめとして国内外で活躍するアーティストが関わっている。静岡県東部で多様なアートに触れる機会が限られているなか、ジャンルにとらわれず、常に新しい表現を創り出すスケラボの活動は、こどもから本格的なアートを求めるおとなまで幅広い年代の参加者を惹きつけている。25歳以下の公演チケット代が安価に設定されているため、若者が地元で負担なくアートに触れられる貴重な機会を提供している。

■スケラボの企画は一言で説明しにくいものが多いが、その魅力を知った参加者の口コミを介した広報により、参加者の層を広げてきた。また、ストリートやショッピングモールで公演し、そこで観客も参加できるしかけを用意することで必ずしもアートに強い関心を持っていない層も本格的なアートに触れるきっかけを作ってきた。

■ワークショップやアウトリーチは参加者がアーティストと近い距離で、主体的にアートにかかわる場となっている。参加者はアーティストのサポートを得て自由な発想や表現を伸び伸びとアウトプットすることができ、これにより自己効力感や生活の質を向上させることにつながっている。

③人々の思いと力を引き出すエンパワメントの装置になっている

■中心メンバーは多様なアーティストがジャンルを超えて協働する中で新たな表現を創りだしたり、新しい仕事にチャレンジしたりすることにより、アーティストやアートを支える人としての力を高めている。また、スケラボで培ったスキルや人脈はスケラボ内だけにとどまることはなく、個々の仕事でも役立てられている。

■若者がスケラボの活動を近くで観たり、スケラボメンバーと話したりすることで、社会を見る視点が大きく広がり、アートが存在する地域の魅力を見出している。

■公開プレゼンテーションの企画により、地域にアートを広げたい人、よりよい地域をつくっていくためにアートの力を必要としている人たちが、想いを口にし、その思いに対してスケラボや他の参加者も一緒に考えていくことで、構想が実現し、地域づくりに寄与している。

(2) 地域のアート人材の共創を促進する「仕組み」と「特徴」は何か？

スケラボの評価情報を分析していくなかで、スケラボが地域に変化をもたらす価値を生み出した理由がステークホルダーのインタビューで触れられていた。スケラボの価値創造を可能にした貢献要素を以下の通り抽出する。

■アートを楽しむことを何よりも大切にする姿勢

スケラボはアートで地域の人が楽しむことを何よりも大切にしている。小さな子どもを対象にするイ

イベントを開催することが決まれば、その対象のことをアーティストたちが深く考えてオーダーメイドの企画を練る、商店街の公演であれば、その空間を利用したパフォーミングアーツを展開する。このように、その対象、その場に合った新しいアートの企画を徹底的に考える、良質なアートを体験する機会を提供することにより、結果として観客による公演自体の高い評価につながる。また参加者が手を動かすワークショップでは、技術を高めたり、画一的な成果物を作ったりすることを目的とせず、参加者が作品を作る過程を楽しむことを重視し、講師はその過程をサポートする。何かの手段としてアートを「活用」するのではなく、専門性の高いアーティストたちが、純粋に地域にアートを提供することを追求していくことで、参加者は普段の生活の質を上げ、また、地域の価値を発見するなど、様々な価値創出に寄与した。

■「アートを提供する側」「される側」の境目を無くす試み

スケラボは「アートを提供する側」「される側」の境目を無くし、そこにいる人たちが主体的に関与することを目指している。ショッピングモールの公演では、買い物客が踊りだし、チェコ共和国のアートフェスティバルでは国籍や年齢を超えた観客数百人が一体となって踊り、最後お互いがハイタッチをするような場を創りだしてきた。

スケラボの公演でも演者と観客の物理的な境を感じさせない空間利用が行われ、演者や制作側と観客と語らう行うアフタートークも公演の一部として双方が楽しむほか、スケラボの中心メンバー自身、出会った人たちの想いを聞き、対話をするを大切にしてきた。

こうした姿勢により人同士の距離狭まり、観客として訪れた人のなかから、イベントの手伝いをしたり、広報に協力したり、中には中心メンバーになったり、というように、豊かな社会関係資本が築かれていった。

■共創を促進するリーダーシップと中心メンバーが共有する価値観

長年舞台監督を仕事としてきた川上氏は、チームで作品を創り上げてきた。良いものをつくっていくために言われたことだけをするのではなく、ひとりひとりができることを考えることが重要であると同時に、チームメンバーが本音を言える環境をつくるリーダーシップが必要と考えてきた。スケラボでも各企画は中心メンバーがプロデュースを務めることも多く、どう企画を発展させていくかは各々に任されている。一方で、良質なアートを届けるために、各中心メンバーがマネジメントや渉外、広報、記録等、それぞれの役割を合わせて力を合わせている。

また、スケラボのビジョンやミッションや明文化されてはいないものの、中心メンバー及び山崎氏のようにスケラボの活動を近くで支える人たちの間でスケラボが大事にしてきた想いやアートや地域に向き合う姿勢が共有されていることがインタビューから伺えた。それぞれの力を引きだすリーダーシップと、共有する価値観が多様な人たちの協働を可能にしていると考えられる。

■地域の人脈の豊富さ

スケラボの中心メンバーの多くは静岡東部在住または出身であり、スケラボと出会う前から地元の人たちとのつながりを持っている。例えば中心メンバーの一人、住氏は三島市の佐野美術館の学芸員を務めた後に、三島市の委託を受けて地域のアートを紹介する仕事をしたり、フリーランスのア

アーティストの集まりに参加したりしてアートにかかわるひととのつながりを構築していた。さらに、出産後、平日日中に地域で過ごす時間が長くなったことで、異業種でありながら自由な発想で地域で取り組みを行っている人との人脈を築いていた。

アーティストに限らず、地域で様々な取り組みをしている人、またしたいと思っている人を招いて行った公開プレゼンは、住氏をはじめとするメンバーの豊富な地元の人脈と積極的な声かけによって実現した。

地域のつながりを通じて、様々な取り組みとアートを融合させていく活動は、外部から一時的の地域を訪問する団体にはできない。スケラボだからこそ、地域の人たちとの協働による企画を生み出し、また公演会場を飛び出して保育園や学童保育、学校など地域の中に出向いて活動することができているといえる。

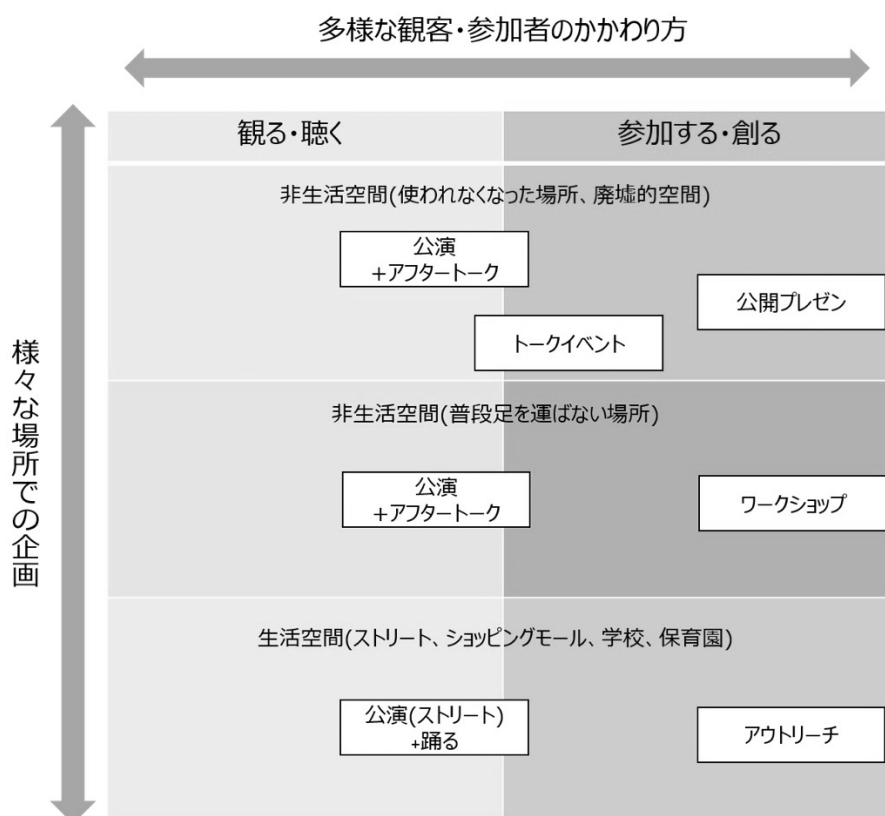
1.概要

1-1.Scale Laboratory

幅広いアートの機会を創出

2016年2月に生まれた Scale Laboratory（以下「スケラボ」）は、静岡県東部を中心に公演やワークショップ等、様々な形でアートを楽しむ機会を提供するグループである。提供する機会は「観る」ことから「創る」ことまで幅広く、使われなくなった建物の一角やストリート、保育園や学校等、多様な場でアートを繰り広げる。（図1）。

図1：多様な活動の展開



地元のメンバーが支える活動

スケラボは発足以来、発起人とその友人や家族の人脈を起点に、地域のアーティストやアートに関心の高い人々が様々なイベント企画に参加者やサポーターとして関わり、そのなかで中心となるメンバーが固定されてきた。11人の中心メンバーのうち8人が静岡県東部在住、1名が静岡県出身海外在住、2名が静岡県外在住であり（2020年4月現在）、本業は舞台監督、パーカッショニスト、デザイナー兼アートマネージャー、イラストレーター、印章店経営、NPO職員兼映像作家、舞踏家、お笑い芸人兼美術講師、設計士等様々である。スケラボの活動は中心メンバーに加えて、公演に出演・協力する静岡内外のアーティスト、広報や運営等様々な支援をする地元の人々によって支えられている。

1-2.評価結果

スケラボの中心メンバー及び関係者へのインタビュー、公演の観客へのアンケート、スケラボの発行する文書を通じて得られた評価情報から、スケラボが良質なアートを地域に提供していることに加えて、地域の文化芸術資源の開発、アートに関わるつながりの社会関係資本の構築、地域の魅力化等、多様な価値を創出していることが明らかになった。

1. スケラボの特徴的な活動方法により、地域のアーティストやアートに関心の高い人たちの間の共創が促進されている

- スケラボは「音楽」「舞踏」のような決まったジャンルにとらわれず、実験的な企画を展開しているため、様々な分野のアーティストやアートに関心を持つ人を幅広く惹きつけている。また毎回の企画の発案をしたメンバーがすべてを決めることはなく、中心メンバーやその他の人とコンセプトを共有し、相談しながら具体化していくことが多いため、多様な人たちがそれぞれの力を発揮できる役割を担ってきた。
- スケラボの中心メンバーや協力者が自分の表現方法やスキル、関心分野を持ちよりながら協働することで今までなかったアートの企画を実現している。

2. 良質なアート体験の機会を提供している

- スケラボの企画には代表の川上氏をはじめとして国内外で活躍するアーティストが関わっている。静岡県東部で多様なアートに触れる機会が限られているなか、ジャンルにとらわれず、常に新しい表現を創り出すスケラボの活動は、こどもから本格的なアートを求めるおとなまで幅広い年代の参加者を惹きつけている。25歳以下の公演チケット代が安価に設定されているため、若者が地元で負担なくアートに触れられる貴重な機会を提供している。
- スケラボの企画は一言で説明しにくいものが多いが、その魅力を知った参加者の口コミを介した広報により、参加者の層を広げてきた。また、ストリートやショッピングモールで公演し、そこで観客も参加できるしかけを用意することで必ずしもアートに強い関心を持っていない層も本格的なアートに触れるきっかけを作ってきた。
- ワークショップやアウトリーチは参加者がアーティストと近い距離で、主体的にアートにかかわる場となっている。参加者はアーティストのサポートを得て自由な発想や表現を伸び伸びとアウ

トブットすることができ、これにより自己効力感や生活の質を向上させることにつながっている。

3. 人々の思いと力を引き出すエンパワメントの装置になっている

- 中心メンバーは多様なアーティストがジャンルを超えて協働する中で新たな表現を創りだしたり、新しい仕事にチャレンジしたりすることにより、アーティストやアートを支える人としての力を高めている。また、スケラボで培ったスキルや人脈はスケラボ内だけにとどまることなく、個々の仕事でも役立てられている。
- 若者がスケラボの活動を近くで観たり、スケラボメンバーと話したりすることで、社会を見る視点が大きく広がり、アートが存在する地域の魅力を見出している。
- 公開プレゼンテーションの企画により、地域にアートを広げたい人、よりよい地域をつくっていくためにアートの力を必要としている人たちが、想いを口にし、その思いに対してスケラボや他の参加者も一緒に考えていくことで、構想が実現し、地域づくりに寄与している。

2.Scale Laboratory の活動

2-1.経緯

発足のきっかけは2015年12月、現在スケラボの代表を務める川上大二郎氏が静岡県函南町の自宅に友人を招いて開催した小さなデッサン会だった。デッサンにモデルとして東京から参画していた舞踏家のパフォーマンスを見たいという声があがり、同日夜、デッサン会の参加者やその友人・家族が集まる中、静岡県三島市のレストランカフェでライブパフォーマンスが繰り広げられた。2016年2月には川上氏は自由にアートを楽しむこうした取り組みをScale（測り・尺度）、Laboratory（実験室）を組み合わせ「Scale Laboratory」と名付け、友人や地域の仲間とともに、公演やワークショップ、アートトーク等を沼津市や三島市等静岡県東部を中心に多様なアート活動を展開していく。最初の活動から2020年3月に至るまで、スケラボは静岡県内で102回、チェコ共和国で4回、真鶴町で1回の計107回のイベントを手掛けた。

川上氏の本業は舞台監督で、公益財団法人静岡県舞台芸術センター（Shizuoka Performing Arts Center : SPAC）を含め、国内外の様々な舞台を手掛けている。東日本大震災後に東京からの移住先を探していた際に自身の家族にゆかりがあり、幼少期によく訪れていた静岡県に居を移していた。スケラボ始動のきっかけとなった良質なアートを生で楽しむ機会を地域の人と分かち合いたいという想いと、その想いに共感したひとたちから広がるつながり、そこで得た仲間とにジャンルにとらわれない唯一無二のアートを共創していく試みは発足当時から現在まで変わらずスケラボの個性の根幹を成している。

当初は中心メンバーの手弁当で行っていた活動だったが、2016年10月に静岡県文化プログラムの採択が決まり、その後連続して助成を受けたことにより、活動の幅が厚みを増してきた。

2-2.特徴

スケラボの活動の幅が広がる中で、発足当初から現在に至るまで団体の特徴、あるいは「姿勢」といえるものが形作られてきた。これらの中には発足当初からあるもの、活動の中で加わったもの、意図したもの、意図せずに形作られたもの等様々である。

■自由：ジャンルにとらわれない

舞台美術、音楽、舞踏、写真等ジャンルにとらわれず、またしばしばジャンルを掛け合わせた良質なアートを地域で地元の人たちと楽しむ。

■双方向：人のコミュニケーションから生まれる化学反応を大切にする

アーティスト同士の対話から生まれたアイデア、参加者や観客との言語・非言語のコミュニケーション、地域の人たちの想いをすくって、次の企画や作品作りに反映させる。

■冒険心：唯一無二のアートの機会を創る

街の中心にありながら使われていなかったスペース、アート以外の目的で使われている場所を「地域の文化芸術資源」として見出し、そこでしかできないアートを生み出す。訪れた人が初めて体験するようなアートの機会創造に取り組んでいる。

2-3.実施体制

中心メンバーに加え、ゲスト・アーティスト、地元のサポーターや協働者によってスケラボの活動が展開されている。

■中心メンバー

発足以来、中心メンバーの多少の入れ替わりはあるが、2020年4月時点で11が中心メンバーとして活動している。「概要」で述べた通り、8人が静岡県東部在住、1名が静岡県出身海外在住、2名は静岡県外在住で、多くは創造産業やそれに近い本業を持ちながらスケラボの活動に携わっている。

■地元のサポーター

スケラボの活動に欠かせないのが地域の支援者の存在である。アートへの関心が高くスケラボの活動を応援したい、もっと多くの人に良質のアートを体験してほしいという思いからイベントの告知、当日の運営手伝い等様々な場面で力を貸しており、未成年も含まれる。三島市のレストランカフェ「dilettante cafe（ディレッタント カフェ）」やスケラボが公演で活用する沼津市の駅ビル「沼津 RAKUUN」のように、会場提供で協力するサポーターいる。サポーターはスケラボの手伝いをしながら観客や参加者としてスケラボのアートを楽しむ最もコアなファンでもある。サポーターとして最初のかかわり、その後声をかけられて中心メンバーになった人もいる。

■協働者

障がい児のデイケア施設や保育園、ショッピングモールの運営者等、アートの力を信じ、それぞれが持つビジョン実現のためにスケラボの力を必要とする人たちともに、こうした協働者が運営する施設内におけるアート企画を実現してきた。これによりスケラボも新しいアート表現や地域とのかかわり方を見出し、協働者とスケラボ、双方がかかわることの相乗効果が生み出されている。

■ゲスト・アーティスト

中心メンバー自らがパフォーマンスをしたり、ワークショップの講師を務めたりすることは多いが、メンバーの人脈を通じて県外からアーティストを招聘することもある。公演でのパフォーマンス、公演衣装の制作、ワークショップの講師等、スケラボの活動に欠かせない役割を担っている。

2-4.活動地域

スケラボは主に静岡県東部で活動を重ねてきた。2016年2月の発足から2020年3月までの約4年間の活動地域は以下の通りである。

図2：Scale Laboratoryの活動地域（2016年2月～2020年3月）

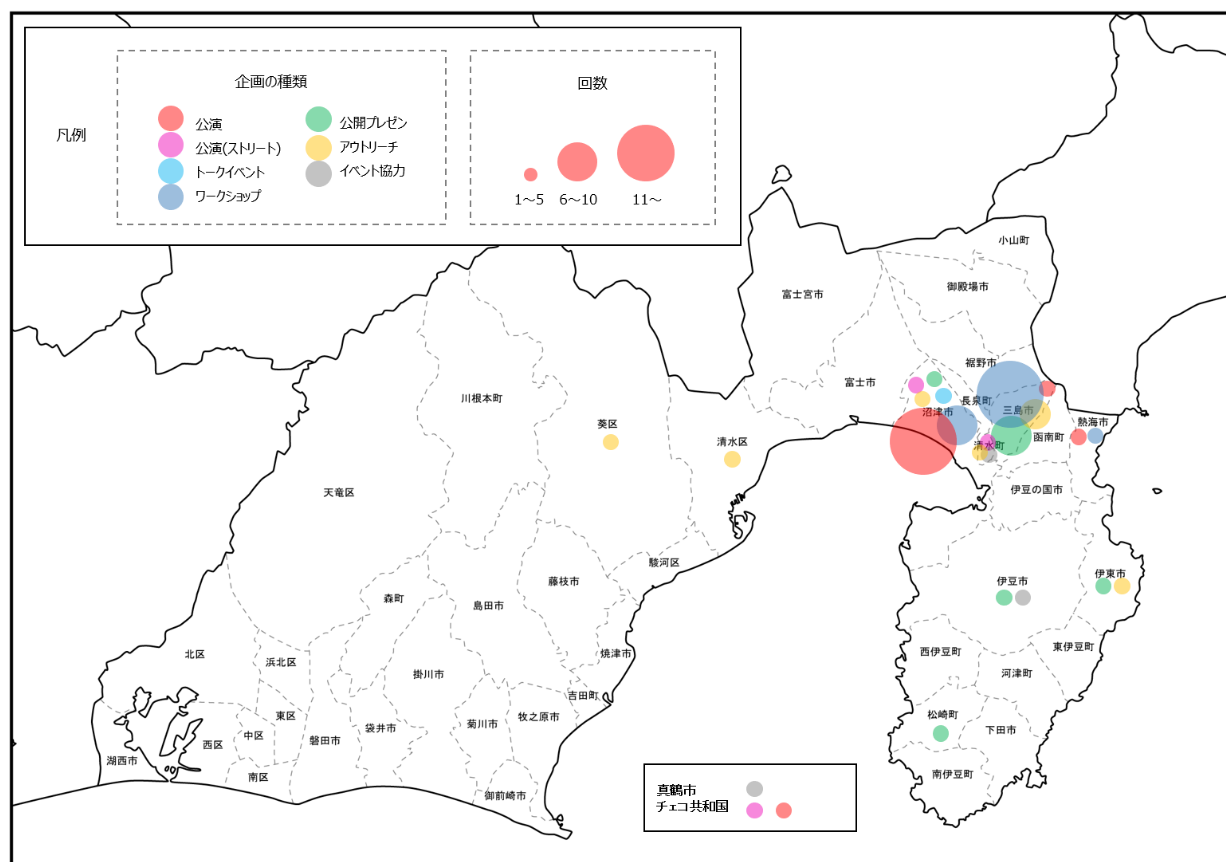


表 1 : Scale Laboratory の活動地域 (詳細)

	アウトリー チ	トークイ ベ ント	ワークショ ッ プ	協力	公演	公演(スト リート)	公 開 プレ ゼン	総計
沼津市	3	4	14		23	3	3	50
三島市	5		11		1		6	23
熱海市 三島市			7					7
熱海市					5		1	6
伊東市	1						2	3
清水町	2			2		1		5
静岡市	4			1				5
伊豆市				1			1	2
松崎町							1	1
真鶴町					1			1
チエコ共和国					2	2		4
総計	15	4	32	4	32	6	14	107

2-5.活動の背景と課題意識

スケラボは「社会課題」を解決するための手段としてのアートではなく、生きることの一部としてのアートを追求してきた。そして、活動を重ねていくなかで、スケラボの中心メンバーの中で、アートが地域にとっても必要不可欠なものとして意味付けされてきた。中心メンバーへのインタビュー及びスケラボの発信物（WEB サイト、活動記録集）で示されたアートの役割や意味をスケラボのメンバーや文書のことばと併せて以下に示す。

■希望の持てる社会へ

アートは衣食住を彩り、衣食住だけでは満たすことのできない心の部分に作用する。アートがあることで人は希望を持てるし、何気ない日常から人生を豊かにする楽しみを見出すことができる。衣食住とともに、アートも人生に不可欠なものである。

「希望が持てる社会にするにはアートが必要。アートにはネガティブなことをポジティブに転化する力がある。人には体だけでなく、心もある。深い悲しみは、お腹いっぱい食べても満たされないが、アートはそれを満たすことができる。」(川上氏のインタビューより)

「アートによっていろいろな見方ができ、心の尺度を変えられる。すごく不幸な出来事を引いてみるとささいなことに思えたり、いろいろな発見をして幸せを見出したりすることができる。」(同上)

「普段と違うものを添えることで『こんな方法あるんですね』『自分でもできそう』と発想が変わる。いつもと同じことがちょっと面白くみえたら良い。落ち込んでいる人がいたとして、和らげるために僕には何ができるのか。ひょっとしたらそれって演出じゃないか。まちとして笑いが多くなって、ニコニコしている人が増えることこそが、ぼくの人生的演出ではないかと思う。」(同上)

■アートを通じてひとりひとりの個性が尊重される、自由でいられる

それぞれの個性のままにアートを通じて表現し、自由でいられることができる。それが新しいことにチャレンジする力になる。

「私たちは一人一人、別の個性を持って生まれてきました。

全く同じ個性の人など誰一人いないでしょう。その個性が、自分の好みを探求するカギであり、自分で好みの何かを作る原動力でもあるのです。

そういう力がなければ、我々はまだ、貝塚を作っていたでしょう。

自分の個性に忠実な人が、自分の満足する何かを作り

（わたしはそれをアーティストというのではないかと思うのですが）誰かがそれを見て新たな発見をする。

それはおそらく、有史以前から繰り返してきたことであります。」（川上氏 「スケラボ となりのアーティストプロジェクト 2018-2020」、p37）

「アートがあることで人は自由でいられる。ものごとを多数決だけで決めてしまうのは危険性がある。大多数の人が言っていることが正しいとは限らない。行かなければいけない道に、少数派の意見が入ることが大事。アートは少数の意見も表現することができる。」（川上氏インタビューより）

「人をワクワクさせる力、こどもたちがかわれるということでは、スポーツもアートも同じ。スポーツと同じように、アートを通じて仲間をつくる、うまくなる、発表して自己肯定感を得ていく。」

（中心メンバー 住氏インタビューより）

「学校も自治体も町内会も、PTA も、地域では前例がないことをやれるチャンスがなかなかない。でも、アートであれば前例のないものをつくっていい。新しいことをやりたいと思っている人がスケラボに声をかけてもらえれば、一緒にやれる可能性もある。」（同上）

■アーティストが活動できる静岡東部に

スケラボが主に活動する静岡東部では、本格的なアートに触れる機会も限られており、創造産業が発達していないため、アート人材が地域で生業を成り立たせるのは容易ではない。アーティストが暮らすことができ、アートのある地域を創っていききたい。

「静岡県東部ではアート関係のイベントをやるのが少ない。見る人も少ない。」

（中心メンバー 辻村氏インタビューより）

「静岡県の中で最も首都圏に近い伊豆地方は、プロとして作家活動をしている人や小さな芸術グループは数多くありますが、それらを牽引し、中心的な役割を果たすホールや美術館、団体が存在せず、それぞれの活動を知ることや、地域やジャンルを超えて協力し合うことが充分できているとは言えません。

また、静岡県中部・西部地区に比べ、マスコミや出版、映像制作などの創造産業の需要が少なく、そのような技能を持つ人材を地域が抱えきれないという問題もあります。

中心メンバーのほとんどが創造産業に関わるプロフェッショナルであるスケラボは、活動を通じ、伊豆地域を高レベルなクリエイティブ人材の“地産地消”地域にしていきたいと考えています。

この活動は、自分たちがこの素晴らしい伊豆に住み続けるための居場所づくりでもあるし、より多くのプロ、プロの卵たちに伊豆に来て欲しい、居続けて欲しいという種まきでもあります。

一番大切なアートの中身やスキルを地域外に頼っていては、『ひとりでも多くの人が、生活と地続きに無理なく芸術を楽しめるローカル』は実現しないと考えるからです。」（スケラボ WEB ページより）

2-6.セオリーオブチェンジ

スケラボは「事業戦略」や「ミッションステートメント」等明文化された方法でセオリーオブチェンジ（変化の道筋）を打ち出していないが、中心メンバーのインタビューやスケラボの発行物から得た評価情報から、「あるべき姿」に至る共通イメージがあることが伺われた。

図3：Scale Laboratoryの中心メンバーが考える変化の道筋

■投入

人	中心メンバー
人	ゲスト・アーティスト、講師
人	地域の協働者・協力者
場所	公演場所
資金	静岡県文化プログラム助成金、自主財源（事業実施により回収）
人	静岡県文化プログラム プログラムコーディネーター

■活動

公演	自主公演 ジャンル横断と即興、世界で活躍するパフォーマーと地元アーティストの掛け合わせ、様々な表現に触れることを目的とした自主企画。
	招待・共催公演 一流の表現者たちを招いて行う企画。公演と共にワークショップやアフタートークを開催する。
公演（ストリート）	
ワークショップ	カフェの空き時間や閉店後の商店などを借りて行う、アートとの距離を縮める講座。スケラボスタッフが各自の得意分野で講師やコーディネーターを務める。
アートトーク	美術本などの読み回しを行い、感想を話し合う
アウトリーチ	スケラボの特性を活かした幼児、児童、生徒向けのアウトリーチ活動
協力	他団体の依頼で企画協力したもの。

■あるべき姿

地域の人	こどもからおとなまで良質なアートを体験できる 個性にあわせて自由に生きられる
地域のアーティスト	地域で活動できる クリエイティブな仕事を生業として成り立たせられる ジャンルを超えて協力し合う
地域社会	アートにより楽しいこと、わくわくすることが地域に増える アートを通じて新しいことにチャンレジできる社会になる 希望がもてる社会になる

3.活動の軌跡（2015 年 12 月～2020 年 3 月）

スケラボは活動を重ねる中で次々に新しい取り組みに挑み、活動の幅を広げてきた。活動の特徴の変遷に基づき、評価者のほうで便宜的に3つのフェーズに別けて概観する。

■草創期（2015 年 12 月～8 月）

立ち上げ時はデッサン会や、紹介された熱海の空き家スペースで実験的な公演活動を主に友人を起点とする人脈を通じて比較的少人数の参加者を得て行っていた。

■拡大期（2016 年 8 月～2018 年 9 月）

2016 年 8 月に沼津駅前のビル「沼津 RAKUUN」の 8F の空きスペースに出会う。施設管理者がスケラボの趣旨に賛同して安価な会場使用料でスペースを貸し、搬入・搬出や人の出入り含めて全面的に協力を得ることが可能となり、2016 年 10 月に決定した静岡県文化プログラムの助成金と相まって、この場所で数々の公演やアートにかかわるワークショップ、トークイベントを開催するとともに、アートに限らず地域で新しい取り組みをしたいと考える人をスピーカーに招く妄想相談会・相談所をスタートした。この時期には、草創期の友人の人脈を超えて、スケラボの活動に共感する多様な層へのアプローチが深化した。

■協働期（2018 年 9 月～）

やがてスケラボはイベントに来る人だけではなく、来ない人、来れない人にも目をむけるようになる。また、妄想相談会や相談所で発露された地域の人たちとの協働の取り組みを実現していく。地域に深く入っていくことで、新たな視点が養われ、スケラボの企画が更に多様化した。スケラボが保育園や学童保育、学校に赴いてアートワークショップを行う「アウトリーチ」活動が始まり、スケラボの公演を観に来ない人たちも含めて楽しめるストリートの公演も行った。

図 4 : スケラボの企画の種類の多様化（イベント回数）

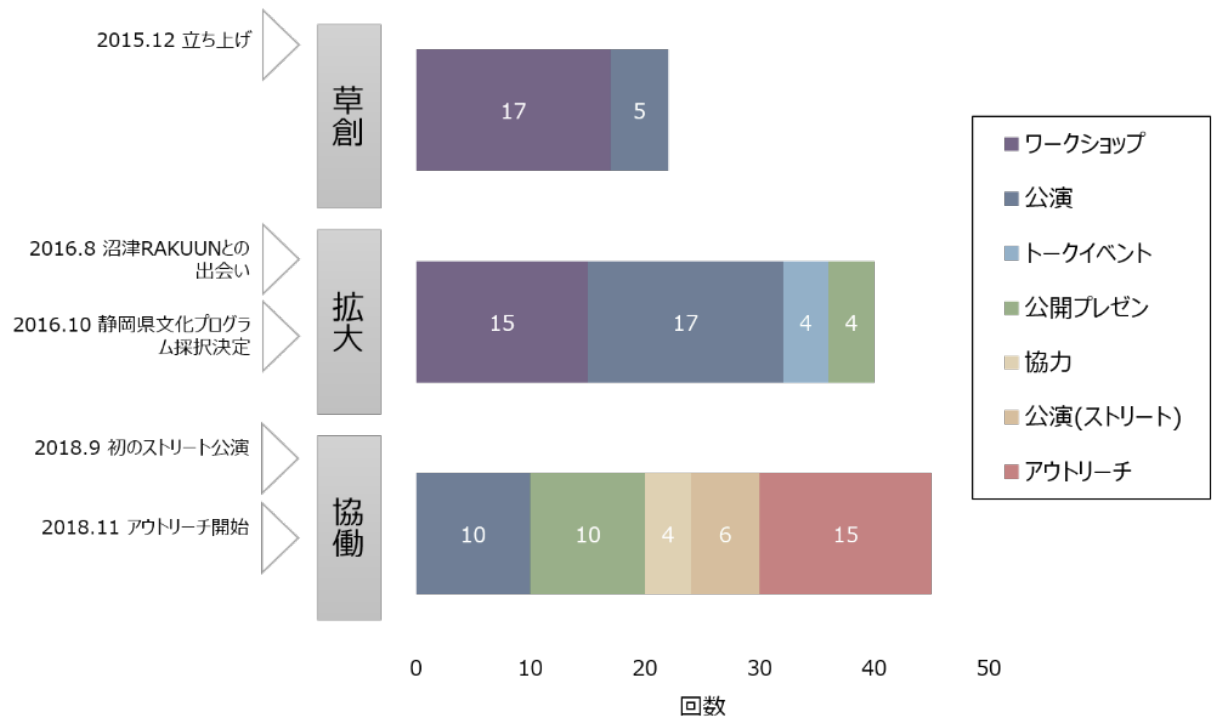
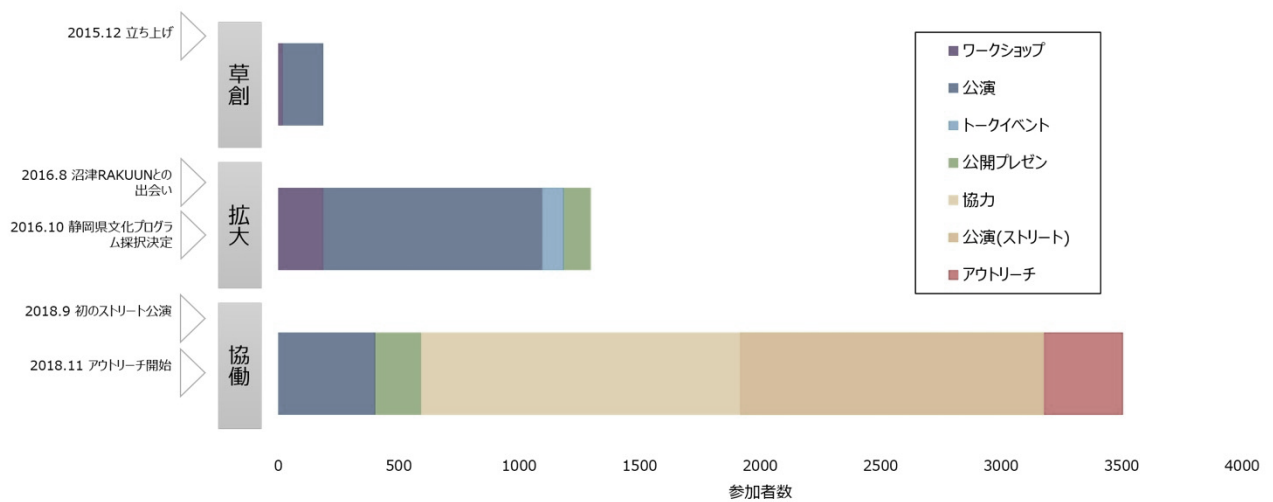


図 5 : スケラボの企画の種類の多様化（参加者数）



	ワークショップ	公演	トークイベント	公開プレゼン	協力	公演(ストーリー)	アウトリーチ	計
草創期	18	170						188
拡大期	186	909	90	113				1,298
協働期		403 (うちチェコ共和国 60)		189	1,323	1,262 (うちチェコ共和国 800)	328	3,505
計	204	1,482 (うちチェコ共和国 60)	90	302	1,323	1,262 (うちチェコ共和国 800)	328	4,991 (うちチェコ共和国 860)

4. 評価結果

4-1. 評価目的

本評価はスケラボにかかわる多様なステークホルダーから評価情報を得て、スケラボの活動によって生まれた変化と創出された価値について見える化すること、及び価値の創出に対する貢献要因を抽出することを目的とする。評価結果は、今後のスケラボが活動方針を検討する際の参考情報として、またスケラボの活動の価値を静岡県文化プログラムやその他スケラボをサポートする関係者への発信に活用されることが期待される。

4-2. アートのニーズ

スケラボが最も多くの活動を行う沼津市は、静岡市や浜松市と並ぶ静岡県東部の拠点都市として発展してきた。かつて沼津駅前には百貨店が並び、文化の発信地にもなっていたが、近年は人口減少が続く、2014年の西武百貨店を最後に全ての駅前の百貨店が閉店した。

公的な文化施設としては、文化財の管理や普及啓発を行う「沼津市文化財センター」と、ホールやリハーサル室、会議室等を備える「沼津市民文化センター」があるものの、アーティストの育成を行ったり、地域に本格的なアートを頻繁に提供したりするようなアートセンターに類する拠点は無い。

インタビューでは沼津出身・在住者（複数）から次のような意見が聞かれた。

静岡県東部ではアート関係のイベントをやるのが少ない。

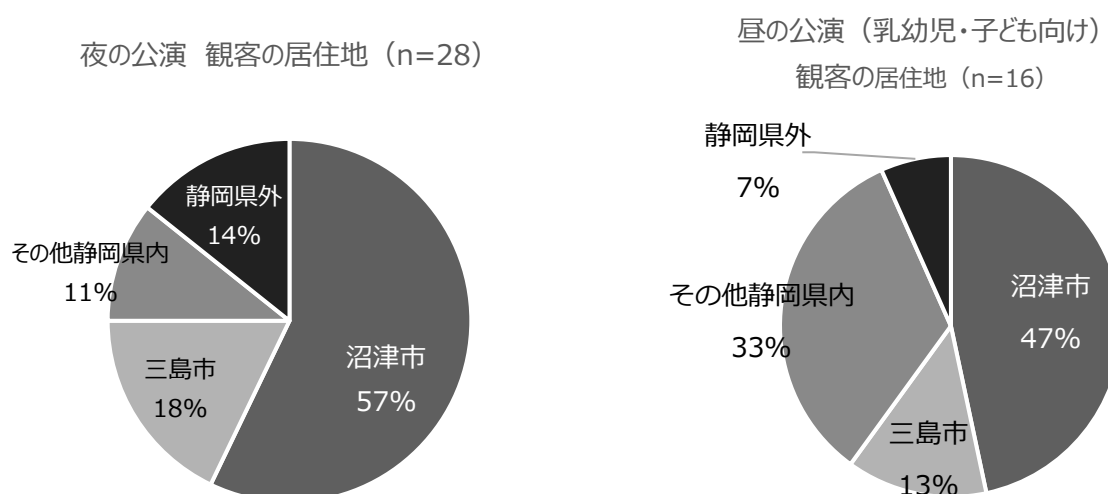
沼津は不便がなく、暮らしやすいが、とびっきりの刺激は求められない。

東京の通勤圏であり、そこにアートを見に行けることから、地域でアートが育たなかったのではないかな。

沼津には何にもないと感じていた。舞台を見たいと思っても、SPACのある静岡や東京まで行かなければならないが、学生にとってはお金をかけていくというのがハードル。東京にはお店もたくさんあり、アートや文化に触れるために、高校生のときは、はやく東京に出たくてたまらなかった。

2019 年の空中音楽会で収集したアンケートでは、観客の 7 割以上が沼津・三島から来場していた（図 6）。今まで 100 回に上るアートの企画を実施し、延べ 4000 人以上の観客・参加者を得ており、設立から 4 年以上経た今でも参加者の足は途絶えないことから、スケラボの提供するアートのニーズが高いことが伺える。

図 6 : 2019 年 12 月 20・21 日 空中音楽祭 参加者アンケート（回収分のみ）



4-3.スケラボの活動によって生まれた価値

本評価からスケラボの活動によって幅広いポジティブな変化がもたらされ、ステークホルダーごとに多様な価値が創出されていたことが明らかになった。

こうした変化や価値の中には、スケラボが意図していたもの、いなかったもの双方が含まれる。それぞれの変化や価値は相互に作用しあっており、また変化の方向もひとつではないが、変化の詳細を見ていくために次表で個人のレベルと地域化にわけて、類型化した（図 7）

図 7 : スケラボの活動によって生まれた価値

■個人・組織のレベル

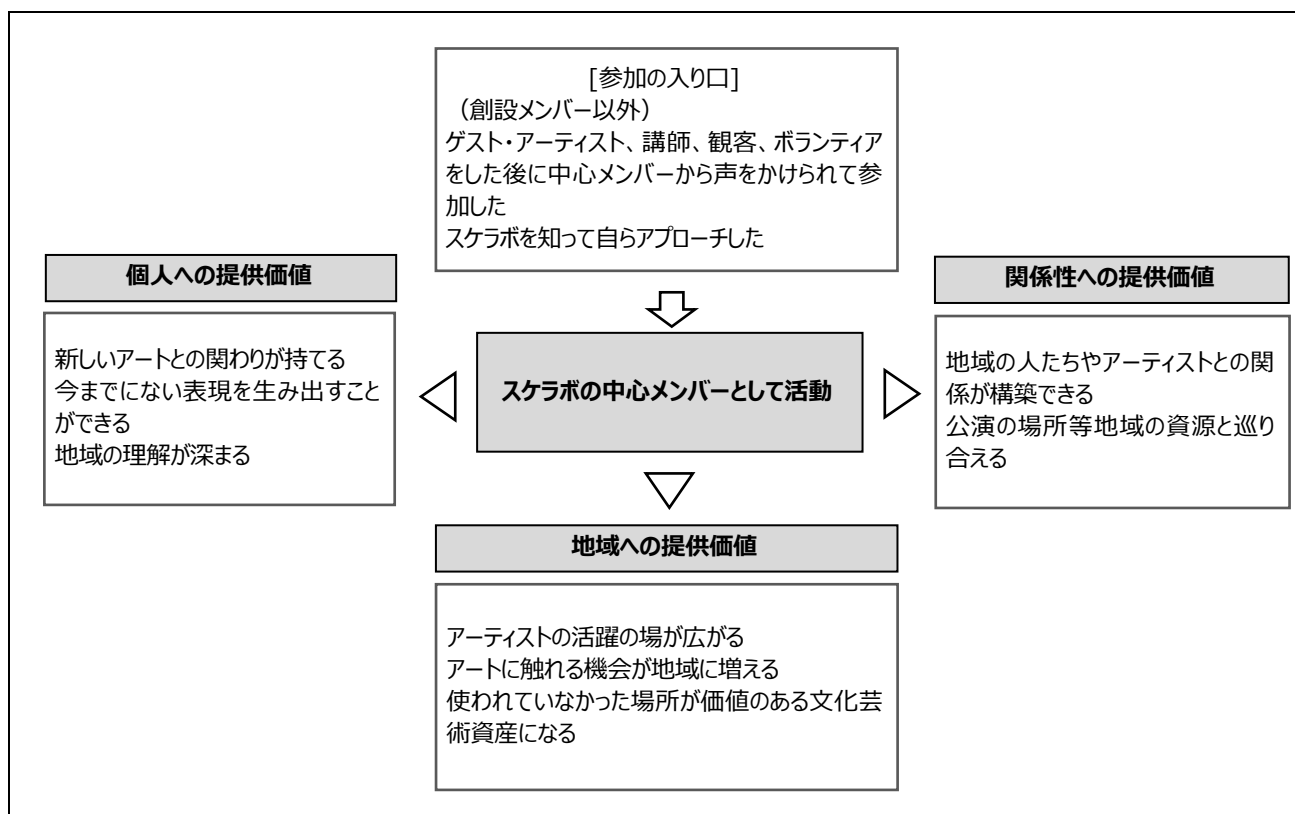
ステークホルダー	個人への提供価値	関係性への提供価値
アーティスト	■新しいアートとのかかわりが持てる ■今までにない表現を生み出すことができる ■コミュニティの理解が深まる	■新たなアートを共創できる ■地域の人たちやアーティスト、公演の場所等地域の資源と巡り合える ■活躍の場が広がる
観客・参加者、サポーター	■良質のアートを楽しむ機会を得ている ■生活の質が向上する	■同じ関心や感性を持つ人が出会える
乳幼児・子ども	<こどもたち> ■良質のアートに触れられる ■表現することを楽しめる <教育者> ■こどもたちに体験して欲しいことをスケラボの力で実現できる	<保育園スタッフ> ■保育園外の人と共に活動する体験が持てる
地域のためにアートの力で取り組みをしたい人	■地域でやりたいことの想いを共有できる、具体化できる。 ■（特に商店街や事業者）商店街や商業施設など、普段は生活の場、モノとお金が交換される場で、スケラボがパフォーマンスを展開することで、賑わいのある場所、幸せを感じる場所にしたいと思う事業者の想いを実現する一助を得る。	■まちに想いを持つ人とアーティストのコラボが実現する

■地域社会のレベル

項目	地域への提供価値
文化芸術資源	■アーティストの活躍の場が広がる ■アートに触れる機会が地域に増える ■使われていなかった場所が価値のある文化芸術資源になる
社会関係資本	■スケラボがなければこの場が無ければ会うことの無かった人が出会う ■地域のアーティストやアートに関心の高い人たちのコミュニティが形成され、さらにその周辺の人につながり、スケラボの企画への参加や協力を通じて多様な人たちの間で社会関係資本が築かれる。 ■人のつながりとアートの力によって想いを実現できる体験をする人が増える ■スケラボがきっかけで地域の人がアートにかかわる活動を行う
地域の価値	■アートの力によって地域の価値が発見される ■地域に愛着を抱く人が増える

以下、創出された価値のうち相関性が高いと思われるものをグループ化し、詳細を述べる。

(1) アーティストの活躍と地域の文化芸術資源の開発



(2) 街の中にアート空間を出現させる

スケラボは既存の舞台がある施設ではなく、街の中でアートの舞台として、普段なら想像もつかない場所を公演やワークショップ等の場に仕立て上げる。今までカフェや保育園、学童保育、ショッピングモール、商店街で活動してきたが、最も多くの活動を行ったのは沼津駅前にある商業ビル「沼津 RAKUUN」の8Fである。

沼津の文化発信地だった西武百貨店が2014年に撤退した後に残された新館ビルを浜友観光株式会社が複合商業施設として改修した「沼津 RAKUUN」にはパチンコやカラオケ店、飲食店等が入っているが、かつてガラス窓に覆われ沼津市が見渡せるレストランだった最上階だけは長い間テナントが入らなかった。

公演場所を探していたスケラボが沼津 RAKUUN の3F にコミュニティスペースがあることを聞いて見学したときに、きれいに整った3Fではなく、天井に配管がむき出しになり、空調さえなく、物置状態の8Fに川上氏が惹かれ、「ここで公演したい」と聞いたときには、施設管理を担当していたE氏は驚いたという。

施設管理会社の承諾を得て訪問から1ヶ月後の真夏に公演することが決定、スケラボがボランティアとともに8Fのフロアを掃除し公演会場に作り替えた。一方、施設管理者は各フロアのテナントに説明をしたり、大きな扇風機を運び込んだりするむなど、多くの人が準備を進めて当日を迎えた。

廃墟感を活かした幻想的な舞台美術とパフォーミングアーツ、ステージと客席が一体になったよう

な空間で、50 人の観客を迎えて公演は成功した。その後 8F と 3F のコミュニティスペースで 2020 年 3 月末までに 40 近いイベントが実施され、延べ 1500 人以上が参加、沼津 RAKUUN が地域のアートセンターのような役割を果たしてきた。

沼津 RAKUUN の 8F は現在、スケラボの公演の他にも、現在移動式映画館の上映会場として、また別のアーティストの演奏場所としても使われている。

この他にも、スケラボが初期に公演の舞台とした熱海市内の廃屋スペースや、カフェや商店街等、それまで使われていなかったスペース、またはアートイベントの実施を目的としてないスペース等が、スケラボの手によってアートの舞台となり、地域の文化芸術資源の開発が促進されてきた。

(3) アーティストの活躍

「場所」に加えて重要な資源はアートを提供する「人」の存在である。

川上氏ら立ち上げメンバーが積極的に地域のアーティストを中心に声がけをするなか、スケラボの存在を知って自らアプローチするアーティストも出てきて、アーティストやアートを専門的に学んだ中心メンバーが集まった。

スケラボの中心メンバーへのインタビューから、個人の変化と地域への貢献の相乗効果が生まれた 3 人のケースを以下の通り紹介する。

ケース 1：パーカッショニスト・鈴木彩氏

【主なポイント】

パーカッショニストとして各地で演奏を行っていた鈴木氏が、スケラボと出会い、はじめて自らプロデュースを手掛けたことで、アーティストとしての幅を広げた。

スケラボではこどもたちを対象にしたコンサートを企画・実施した。

- ・鈴木氏は沼津出身で現在ベルギーに在住し、国内外で演奏を行うパーカッショニストである。沼津に住んでいた 2016 年 2 月にスケラボの中心メンバーに声をかけられた。もともとシャイな性格だが思い切ってスケラボに参加。その 1 か月後に「廃墟感」を活かした熱海の空店舗で、舞踏家と即興の演奏によるパフォーミングアーツを行った。
- ・打楽器を専攻していた大学の研究科在学中に、恩師の影響を受けて以来、クラシック音楽の演奏だけではなく、いつか即興演奏やコンテポラリー音楽の作品づくりをしたいと思っていたものの機会は無かった。スケラボに出会うことで、舞踏家や舞台芸術等別分野のアーティストとコラボする機会に恵まれ、鈴木氏の学生時代の夢がスケラボで実現することとなった。
- ・通常の演奏は楽譜に忠実であるということが前提であり、パーカッショニストには演奏以外の役割は求められないが、スケラボでの取り組みは全く違っていた。パフォーミングアーツは舞台にあがった瞬間から最後までがひとつの作品であり、自身や共演者の身体表現も作品の一部となる。団体の自由で自主性を重んじる雰囲気の中でメンバーとともに照明、ビジュアルデザインまでこだわることができる。そのような中、誰も見たこともないもの、自分が見たいものを届けたい、という思いに忠実に、鈴木氏はスケラボで様々な取り組みを行っている。
- ・こうして創り出された表現の一つが「360°マリンバ」だった。川上代表から「何かの楽器でお客さんを囲むような形を作れないか」と発案があり、そこから着想を得て、ステージや演奏内容、共同演奏者とのパフォーマンス等をプロデュースし、公演した。現在、360°マリンバは鈴木氏の代表作のひとつとなっている。
- ・「360°マリンバ」を携えて地域に入り、スケラボが美術の専門指導を依頼されている保育園のために行

ったコンサートでは、通園するこどもたちと保護者、そして、地域の特別支援学校に通う視覚障がいのこどもたちに演奏を届けた。視覚障がいのこどもたちはマリンバの輪の中に入り、360°から聞こえてくる音を体験した。

- ・鈴木氏が現在暮らすベルギーでは、子ども向けコンサートであっても、おとなが聞くような多様な音楽を聞かせる。鈴木氏はかねてより、日本では子どもの音楽の選択肢は少ないと感じていた。例えばおとなには、クラシックやジャズなど音楽の選択肢はあるが、日本の子ども向けコンサートでは、童謡を大きな音で演奏することが大半である。かねてから「これからおとなになっていく人のために何かしたい」という思いを持っていた鈴木氏はスケラボの企画として小さなこども向けのコンサートをプロデュースし、2019年12月の公演「空中音楽祭」のなかで、乳幼児・児童向けのコンサートを3度にわたり行った。映像と空間芸術、演奏と楽器に触れる機会を組み合わせ公演は、イラストレーター、映像作家、舞台芸術、イベント運営等、スケラボの他の中心メンバーの力によって実現した。
- ・鈴木氏は「スケラボでの企画は共同作業でなければ生まれない。視点の提供、問いかけ、イラスト作成や舞踏、映像制作、イベント運営をするすべてのメンバーの存在があって作品が成り立つ。」と語る。

ケース2：制作支援/マネジメント・辻村聡子氏

【主なポイント】

大学・大学院で芸術を学んだ後、芸術関係の就職は狭き門で一度断念。スケラボ立ち上げ後、最初は観客として、その後中心メンバーとして活動。

本業の印章専門店の勤務の傍ら、スケラボの活動に欠かせない運営や制作支援を行い、地域にアートを届けている。

- ・辻村氏は沼津在住。親の影響で子どものときから絵画に親しんでいた。高校卒業後は北陸の芸術系の大学に進み、その後同大大学院で美術館や美術史、能舞台の研究を行う傍ら、現代美術館に通った。現在、沼津市内の印章専門店の経営しながら、中心メンバーとしてスケラボの活動にかかわっている。
- ・大学入学後間もなく、教諭から美術館や博物館の学芸員は募集人数が少ないので、就職は難しいと言われ、ショックを受けた。当時は学んだことを活かせる場は美術館、博物館、文化財団以外想像がつかなかった。
- ・大学卒業後は静岡で観光の仕事に就き、その後家業の印章専門店で勤務を開始した。忙しい仕事の傍ら、SNSを通じて三島市のアーティストにつながり、スケラボの存在を知ることとなった。
- ・当初は沼津市内で行う公演やワークショップに観客として足を運び、アートを楽しんでいたが、運営の人手が不足していた様子を見て、また、スケラボに魅力に感じていたこともあって、川上氏の声がけを受けた後、中心メンバーになった。
- ・辻村氏は「来た人にいかに楽しんでもらうのか」を常に考えて、公演やイベントの運営を行う。活動内容は広報、名簿の管理、イベント当日の受付や案内、公演の制作支援その他事務方の業務等多岐にわたる。スケラボ初の海外公演となったチェコ共和国の公演にも全行程参加し、出演者をアシストした。
- ・大学卒業後アートを創る側、届ける側としての活動を一度断念したものの、スケラボの中心メンバーとして参加することで、地域にアートを届けるうえで欠かせない役割を担っている。
- ・辻村氏は「スケラボに出会わなかったら、趣味に美術館に行ったり、舞台公演に行ったりしたことは続いていたかもしれないが、ずっとお客さんのままだったと思う。アートにかかわるという道は十人十色でいろいろあると今は思っている。今はいろいろな形でアートにかかわることができて楽しい。本業でも、商品の魅力をアピールするなど、人に伝えることを意識するようになった。」と語る。

ケース3：映像制作・磯村拓也氏

【主なポイント】

大学の芸術学部でグラフィックやWEBデザイン等を学び、卒業後はアートから離れていたが、スケラボへの参加により再びアートの世界に。

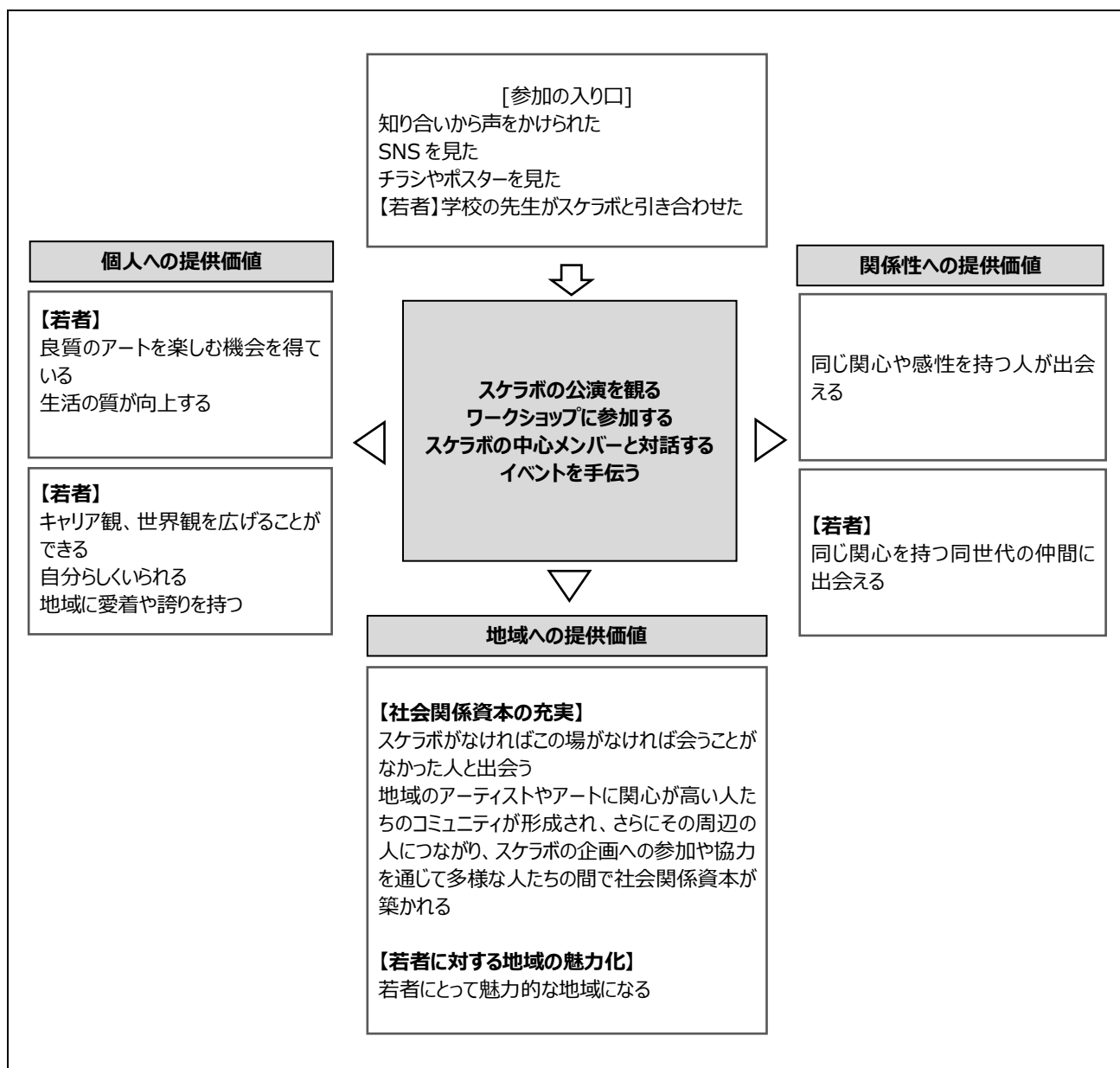
スケラボの活動を動画で発信するほか、アウトリーチのワークショップで子どもたちに映像を取ることを楽しさを伝えた。また、映像作家として活躍の場を広げている。

- ・磯村氏は沼津出身、沼津在住。大学の芸術学部でグラフィックやWEBデザイン等を学び、卒業後はアートから離れていた。
- ・スケラボの立ち上げの半年後に「遊びに来なよ、ついでに映像もとってよ」と知り合いに声をかけられて沼津のRAKUUNにおけるスケラボの公演を観に行った。それまで静岡では大道芸やバレー教室の公演等しか見たことがなかった磯村氏にとって非常に印象的なスケラボとの出会いとなった。廃墟感が魅力的に演出された舞台、観客と舞台の境目がほぼ無く、一つのステージのなかにみんながいる感覚等、初めて見る光景に衝撃を受けて夢中で映像をとった。
- ・もともとインドア派で、声かけがあってはじめて出かけるタイプだったが、その後数回の声かけを経てスケラボの中心メンバーとなった。現在は公演の記録をアーカイブしたり、PR動画を制作したりするほか、自らが講師となってアウトリーチ活動も行っている。2019年には、障がいのある子どもたちの学童保育（放課後デューサービス）で映像制作のワークショップを行った。こどもたちにカメラを渡しての施設の紹介を撮影してもらい、子どもたちが撮影した動画をその場で編集、同日上映会をした。子どもたちがカメラマン、照明係、ナレーター等、好きな役割を担い、先生を追い掛け回すなど、楽しい動画を皆で楽しんだ。
- ・川上氏の後押しもあり、磯村氏が撮影したスケラボの公演やPR動画をYoutubeで見た人たちから映像の仕事の依頼が来るようになった。ダンスや音楽イベント、現代サーカス等アート系のドキュメンタリー動画や、職人のPR動画などを制作した。現在NPOの勤務と映像制作の二足の草鞋を履いて活動している。
- ・スケラボのアートの企画に映像をプラスすることでファンが増えたり、魅力が増したりすることをうれしく思い、パフォーマー自身がなかなかできない撮影を通してアートにかかわれていると感じている。

上記3ケースの共通点として、①スケラボのメンバーになったことで、ジャンルを超えたアーティストとの協働や、求められた役割によって、メンバーの力が引き出されたこと、②各人の得意分野が組み合わせり、グループ総体として新しい表現やアートの機会を地域に創出したことが見て取れ、いわばスケラボがエンパワメントの装置として働き、ひいては地域の人々がアートに触れる機会を増やしたといえる。

また、スケラボは地域に密着して活動するため、地域のアートのニーズの理解や地域で実践していくためのノウハウが蓄積されてきた。川上氏自身、それまで長いこと全国各地で仕事をしてきたものの、その地域の困りごとにかかわることがなかったが、スケラボで活動し始めてから、まちをもっとよくしたいと思っている人たちとのかかわりが増え、その人たちをどうアートを通じて手伝えるかを深く考えるようになったという。上記の3ケースでも、それぞれが地域の子どもたちがアートに親しんで欲しい、地域にアートの楽しさを提供したい、沼津のアートを発信したい等、地域に対するそれぞれの思いを持ち、スケラボでその思いを実現する機会を得ている。

(4) 観客・参加者、サポーターと社会関係資本の充実・地域の価値向上



(5) 良質なアートの提供と生活の質の向上

スケラボはアーティストも、観客・参加者も一緒になって良質のアートを楽しむことを大切にしている。アーティストが地域に提供する作品は、冒険心にあふれ、必ずしも「万人が広く欲するアート」とは限らないが、公演に足を運んだ参加者の満足度は高い（表2）。

表 2: 2019 年 12 月 20・21 日 空中音楽祭 夜の部参加者アンケート（回収分のみ）

	公演を楽しんだ （回答無し 1）	スケラボとの 対話を楽しんだ （回答無し 2）	また公演を 観たい	舞台芸術により興 味をもった（回答 無し 2）
そう思う	26	16	24	16
まあまあそう思う	1	9	4	10
あまりそう思わない	0	1	0	0
そう思う思わない	0	0	0	0

公演では観客とのアフタートークを必ず実施し、参加者同士で感想を言い合ったり、出演者や演出者に質問したりして対話を楽しむ。またワークショップでは参加者自らが手を動かすなど主体的にアートにかかわる機会を提供する。インタビューを通じて、以下の通り、スケラボのイベントに参加してアートの楽しみを見出した人たちのコメントを得た。

・「学生のときにモダンダンスをしていた。現在社会人 2 年目だが、満員列車でのきつい通勤をしながら、会社では感情を押し殺して仕事をしている。そのようななか、スケラボの公演を観に行っている。音楽やダンスは言語化しきれない部分も表現できる。スケラボのアートに触れていることで、一瞬を通り過ぎないで考えて行くことができる。流されずにそのときの感情を動かして言葉にしてく。答えがないから考えないといけない。アートを見ることで心のバランスがとれている。」

・「子どもの頃から絵を描くのが好きだったが、まわりに上手い人が多く絵を書くことが苦痛になり、それ以来離れていた。スケラボの『おえかきの時間ですよ』というイラストのワークショップに参加し、とても楽しい時間を過ごした。講師が自由に絵を描くのを見て、誰かに褒められるのではなく、自分が元気になるのであれば描きたいという気持ちになった。今では家族や友人のイベント時にウェルカムボードを書くなど、日常生活の中で絵を描くことを楽しんでいる。」

・「ソーイング・ワークショップに参加した。講師が気さくで、アート感覚にあふれたワークショップだった。縫うだけではなく、色をつけたり装飾したりして『こうじゃなきゃいけない』、というのが取り払われて自由につくれた。ワークショップでは否定が全くなく、自分で自由に表現できることにより、自分が『できる』という感覚が得られる。作ったものをみんなで褒め合い、できあった作品を着てフォトグラファーが写真をとってくれた。本当に楽しく、また写真のクオリティがすばらしかった。ワークショップに参加した人の中にはソーイングの自由な楽しみ方を知った人も多かったと思う。」

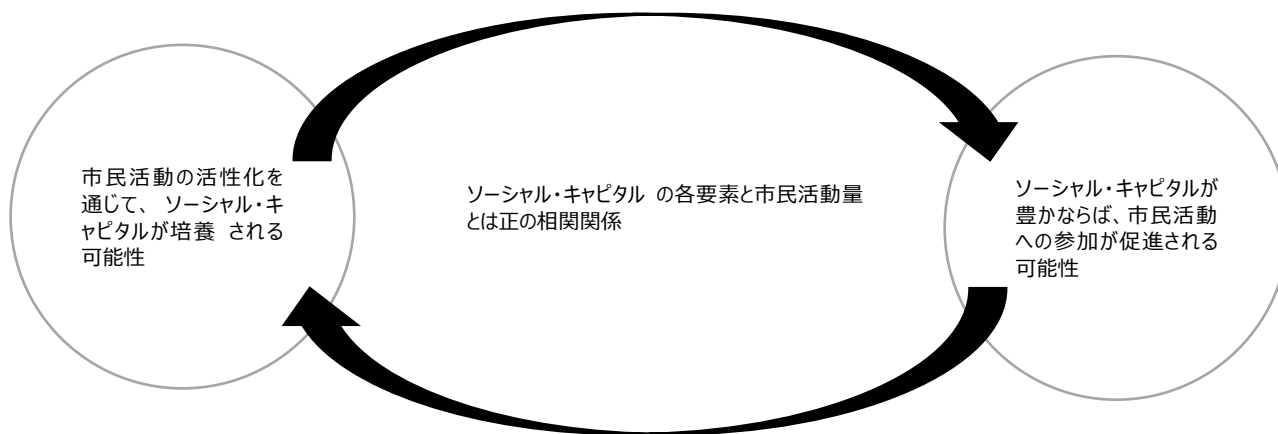
上記の通り、イベントでアートを楽しむことに加え、自分が自分らしくいられる、ストレスを軽減できる、自己効力感が得られる、日常生活を豊かにする、といった生活の質の向上に寄与していることが見て取れる。

（6）アートにかかわる社会関係資本の構築

社会関係資本（Social Capital）とは、人々の協調行動を活発にすることによって、社会の効率性を高めることのできる、「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴を指す。物的資本

(Physical Capital) や人的資本 (Human Capital) などと並ぶ社会にとって重要な資本とみなされており、2005 年の内閣府経済社会総合研究所の調査によれば、社会関係資本と市民活動量とは正の相関関係があることが確認されている (図 7)。

図 7 : ソーシャルキャピタルと市民活動の量の関係



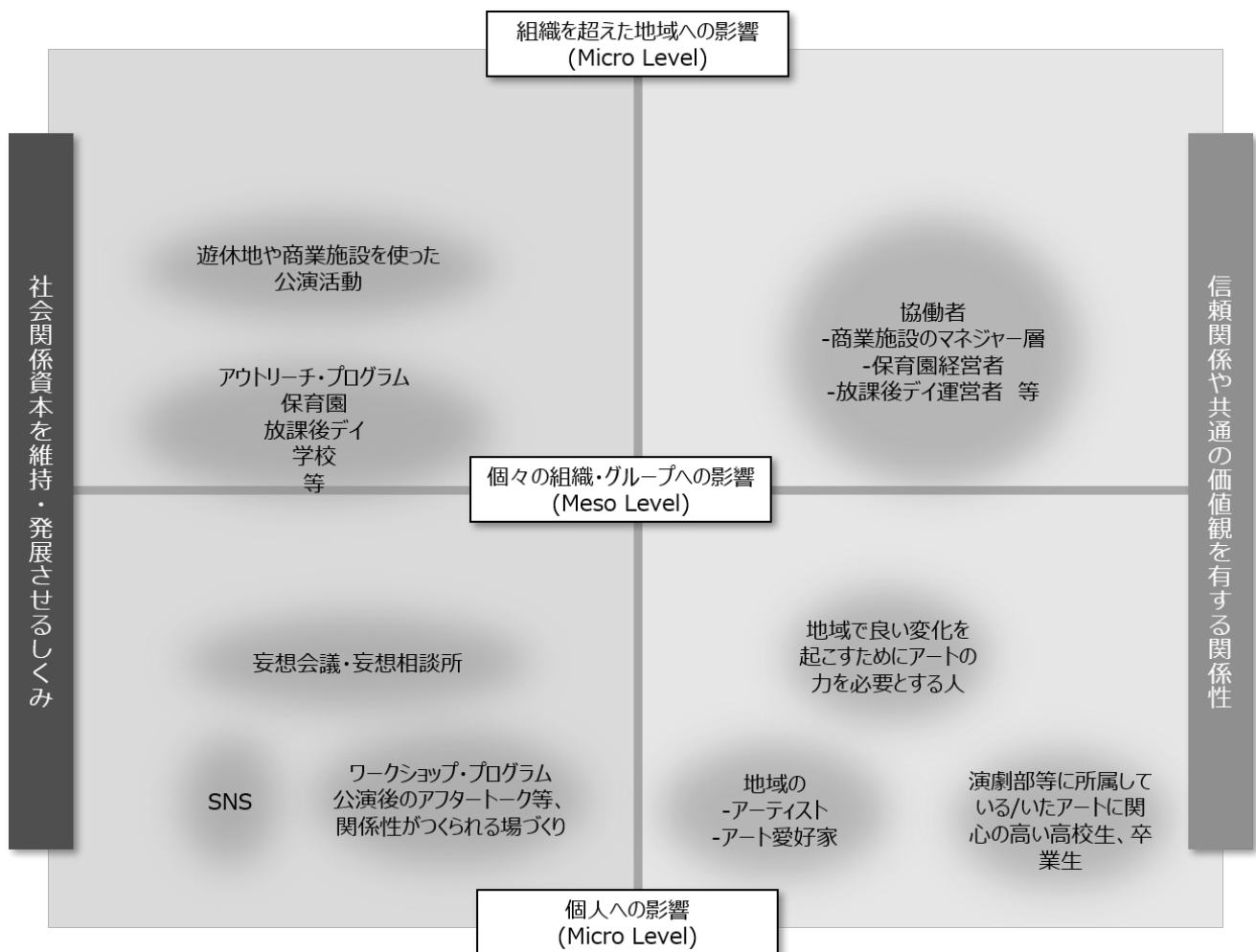
出典：コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書
(内閣府経済社会総合研究所編 2005 年 8 月)

スケラボの活動は地域の人たちにより支えられ、地域の人たちはスケラボが提供するアートの機会を楽しみ、交友関係を広げ同じ関心を持つ仲間に出会うことができている。

スケラボの立ち上げ時は、川上氏とその友人を起点とした人脈から、アーティストやアートに関心のある人たちがつながり、デッサン会や読書会、美術史の連続講座、小規模な公演等のスケラボのイベント時にさらに人の輪が広まり親交を深めていった。スケラボが行う公開プレゼンテーション「妄想会議」「妄想相談会」により、地域で様々な取り組みをする人たちも含む、多様な関心を持ち、様々な背景を持つ人たちのつながりが形作られ、発足から 1 年後にそれまで関わった方々への感謝の意を込めて開催した「妄想感謝祭」には 83 人が集うまでになった。アートを生活の一部としてとらえ、敷居を低くしていること、ジャンルを超えたアートの取り組みを行っていること、中心メンバーも、地域の人と一緒に楽しむことを大切にしていること、アフタートークやワークショップ等で参加者や中心メンバーがたくさんの対話することなど、スケラボの中心メンバーやそこに集まる他の参加者と距離が縮まり、下記のケースのように、参加者としてアートを鑑賞するだけでなく、感想を言い合ったり、イベントの手伝いをしたりする関係性が創られてきた。

スケラボの活動に寄って築かれた社会関係資本の概念図を、「関係性」と「しくみ」に分けて図 8 に示した。

図 8 : Scale Laboratory の社会関係資本の概念図



スケラボを起点とする社会関係資本の構築には、「つなげる人」の存在が欠かせない。そのひと、山崎氏のケースを紹介する。

ケース 4 : スケラボのサポーター・Yoko 山崎氏

【主なポイント】

清水町でファッション雑貨の店舗を経営。スケラボのワークショップへの参加をきっかけに、スケラボのサポーターになった。

スケラボのアートの捉え方に深く共感している。

- ・山崎氏は友人のスケラボの中心メンバーから声をかけられて「妄想会議」に参加、「なんて面白い人たちなんだろう」と思い、その後様々な企画に参加した。ワークショップではそこで出会った人たちと交流を深めた。将来アート方面を目指している女子高校生がいて、彼女の書道展を見に行ったり、スケラボのイラストレーションのワークショップにも声をかけたりした。
- ・スケラボの企画への参加を重ねていくなかでスケラボの「ぶれないアート感覚」、「すべての生活の中にアートのものが潜んでいるというメッセージ」を感じ取ってきた。好きな服を着ることも含めて、感性をゆさぶれること全てをアートとしてとらえていた山崎氏にとって共感する部分が多く、また皆でアートを楽しむというスケラボの姿勢に賛同した。
- ・スケラボの企画に多くの人に参加して欲しいと思い、店舗でスケラボのイベントの広報を行っている。

スケラボの企画はチラシを見ただけで、どんなものかわからないため、山崎氏からセンスが良い、楽しいイベントであることを伝えている。お店に来る人はファッションに興味がある人が多いため「センスがいい」という言葉は響くという。

- ・山崎氏は「人集めは私の役目。チラシやポスターを掲示するだけでなく、このように声をかけてつなげることが大事だと思う」と話す。

山崎氏はスケラボのファンであるとともに、スケラボのアートへの姿勢に共感し、周囲の人にスケラボの活動を発信してきた。これにより、スケラボの中心メンバーだけではコンタクトし得ない人々たちをスケラボの企画にいざなうことができた。山崎氏のようにスケラボへの共感と行動力により、社会関係資本を築くカギとなった人物に、若者とのつながりをつくった加藤氏がいる。

スケラボの活動には高校生を含む若い世代が参加しており、若い世代とのコラボ公演も行ってきた。こうした若者たちをスケラボに引き合わせたのが、静岡東部で活動する演劇人であり、当時高校の講師でもあった加藤剛史氏であった。スケラボと出会ってから3日後に沼津 RAKUUN で開催された「妄想会議」に登壇、「面白い場所に、面白い人が集まり、面白いことが発露する、その現場にただ胸踊った」と語る加藤氏は、それ以降、「地元で唯一無二のアートが生まれている」と演劇部の生徒や、ダンスを行っている生徒たちに声をかけてスケラボの公演に引率していった。そうしたなか、自ら参加を重ねる生徒も出てきた。

加藤氏は学生時代から演劇に打ち込んできた。同世代の演劇仲間が就職や生活の変化に伴い演劇から引いていく中、好きなことに蓋をしない、どこからどこまでが自分の趣味で、どこからどこが自分の生き方なのかを決めない人生を送ろうと決め、自ら演劇を続ける一方、正解・不正解が無い演劇は人間に向き合う力を高めることができるとの考えから、高校で勤務を始めてからは演劇部の顧問として生徒たちに向き合ってきた。仕事は忙しく、学校でできることも限られているなか、地域でアートを実践しているスケラボと生徒たちを引き合わせることで、生徒たちの世界観が更に広がっていった。

山崎氏や加藤氏のような「つなげる人」の存在や、スケラボ自身が地域に出て行き積極的に関係性を築いていったことにより、短期間でアートにかかわる豊かな社会関係資本が構築され、スケラボの企画の幅も広がっていった。賑わいを求める商店街とともにストリーートの公演を実施したり、本格的なアートをこどもたちに触れさせたいと思う保育園や学童保育でアウトリーチ活動を行ったり等、より深く地域の中に入り込んでいくことが可能となった。

(7) 若者の変化

アートに関心のある高校生がスケラボの公演に通い、中心メンバーと対話をしていくなかで、彼ら自身の世界観が広がっていった。

スケラボに惹かれる若者たちは、時として同世代のこどもたちと好きなアートの話で共有できていない。スケラボと接点のある若者のインタビューからは、「高校までは係るおとなが学校の先生と近所のおばさんしかいない。人間関係ができたところで、同年代のこどもくらい。」と人間関係が

狭いこと、「おとなとは話が弾まない。」「進学校に通ったが、同世代の子どもたちと話が合わない。」といった自分の想いを共感できる人がいないジレンマを抱えていた。

スケラボの公演を観に行き、それまで出会ったことのないアートを人生の中心に置くおとなと対話したことで、若者の世界観が大きく広がった学生のインタビューからは「対等に話してくれる」「話すことで思っていたことが言語化できる」「いろいろな生き方があることを知った」等の声が聴かれた。

その中で、スケラボが若者の成長と地域の魅力化に寄与したケースを紹介する。

ケース 5：高校時代にスケラボと出会い、大きく影響を受けた T 氏

【主なポイント】

沼津市で息苦しさを感じていた高校時代にスケラボに出会い、視野が広がった。

同じ関心を持つ仲間やアーティストとの出会いを通じて、地方だからできることがあることを知り、沼津で暮らすことに魅力を感じている。

- ・ T 氏は 20 代女性。高校まで沼津で育ち、現在東京都内の大学に通う。
- ・ 中学卒業後、地元の進学校に進学したが、周囲には、「自分の偏差値に見合った東京の大学に行って大きな会社に就職にする」という考えの同級生が多く、将来の夢を語っても「実現できるの？大丈夫なの？」という反応が大半だった。生徒会や所属する演劇部でも前例や決まり事に従うことが当たり前になっており、新しい提案をしても受け入れてもらえず周囲に合わせることに息苦しさを感じていた。
- ・ 他校の演劇部の顧問だった加藤氏に紹介されて、沼津 RAKUUN にスケラボの公演を観に行った。廃墟的なスペースを使っているところ、好きな場所に座れること、アフタートークでアーティストと話ができることに驚いた。毎回違うものをみせるスケラボに魅せられ「今度行ったらどんなものが見られるんだろう」とわくわくしながらスケラボの公演に足を運ぶようになり、やがて手伝いをしながら中心メンバーと話しをしたりするようになった。
- ・ 最初は、自分はまだ子どもだから、真剣に話を聞いてくれないのでは、と感じ、中心メンバーから「どうだった？」と聞かれても、「楽しかった」、とだけ話していたが、耳を傾けてくれる姿勢を見て、感じたことをそのまま伝えることにしたところ、どんなことを話しても、同じ目線で反応が返ってくる体験をした。T 氏は「おとなと素直に話せる体験があそこでできたことは大きい。自分の意見は絶対に伝えた方が良く、と思えるようになった」と話す。
- ・ スケラボに集まる同世代の若者は皆アートが好きで、T 氏自身の「アートが好き」という思いを存分に共有でき、学校だけでは得られない友人関係を築くことができた。
- ・ スケラボと出会ったことで柔軟な発想を持てるようになった。それまでに将来やりたいことに迷いながら息苦しさから逃れるために東京に行くことを考えていたが、自分を表現できる方法はいろいろあるし、地元を離れることが唯一の道ではないと感じるようになってきた。
- ・ また、スケラボの廃墟的空間や商店街でのパフォーマンスを見たことで、空間利用についての視点が養われた。現在通う東京の大学の実習で地方に行ったときに「スケラボだったらこの空間をこうやって活用するのではないか」「ここはこのように活用できるのではないか」という目線で観られるようになり、人が多く、地縁的なつながりが薄い東京ではできないことが、地方だからこそできる、物質では測れない地方の豊かさと可能性を感じている。今は大学卒業後沼津に帰りたいという思いが強い。

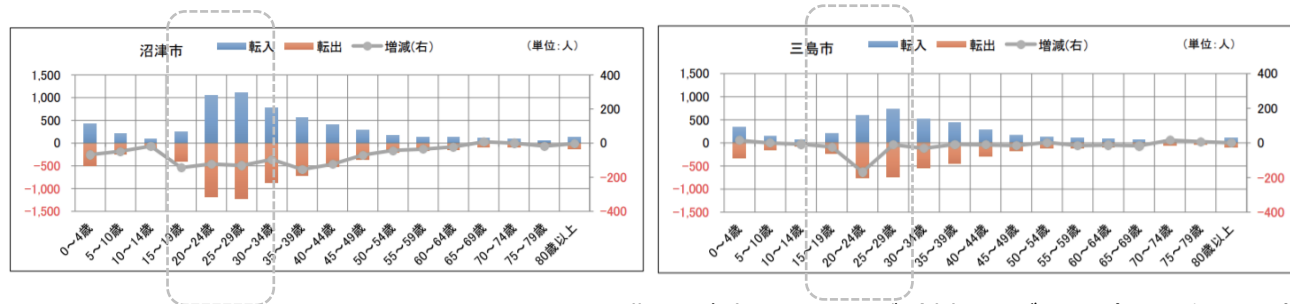
T 氏のケースは、一度都市部に出た若者が地元に戻ることを決断する要因について示唆を与えている。

日本全国の地方都市と同じく、スケラボが活動する沼津市や隣の三島市でも人口減少が進んでおり、自治体の社会保障関連費の増大や利用者減による公共交通の縮小、生産年齢人口の減少に伴う労働力不足、地域コミュニティの機能低下等が懸念されている。

人口減少の原因は少子化に加えて若者の転出超過にある（図 9）。

※沼津市はららぽーとの開設もあり、2019 年は 37 年ぶりに転入者が転出者を上回った。

図 9：2013 年（平成 25 年）の転出入状況（沼津市・三島市）

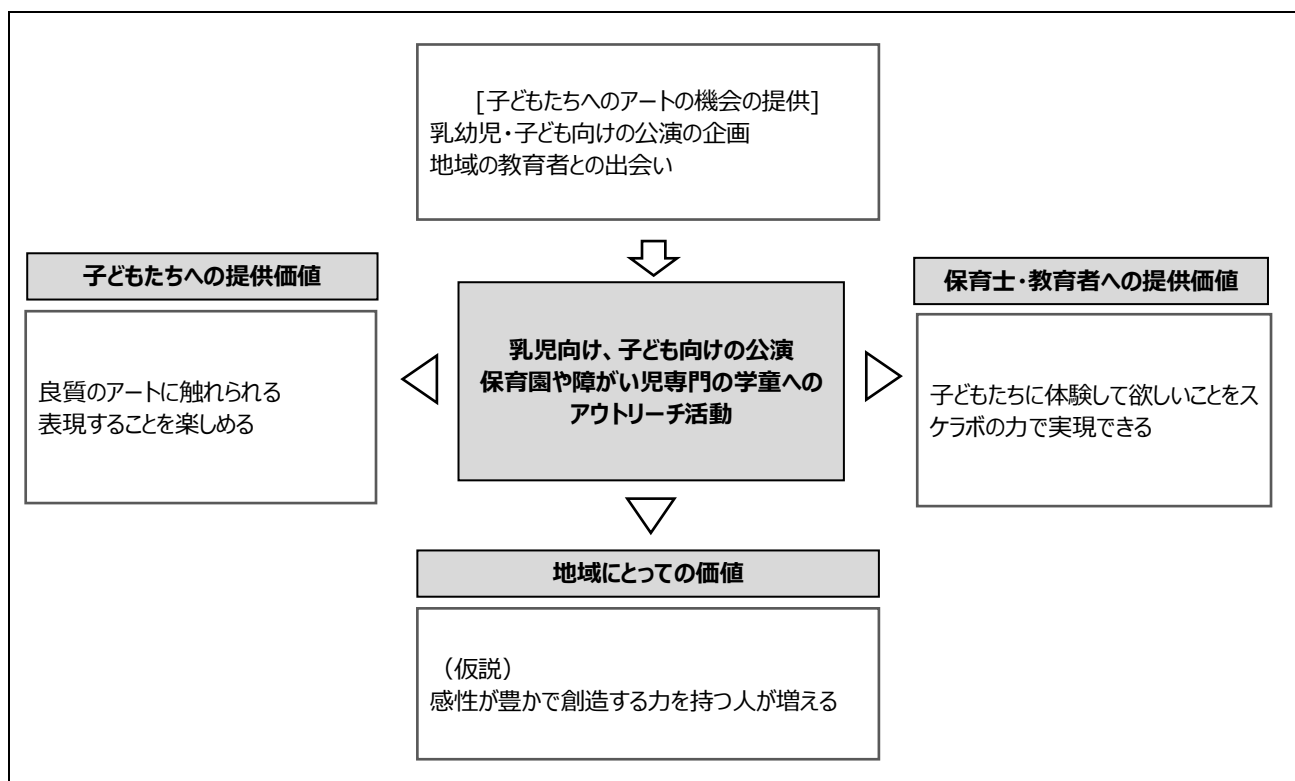


出典：沼津市まち・ひと・しごと創生人口ビジョン（2015 年 10 月）

各自治体は今後の人口減少を抑制する施策として若者を対象に定住支援や企業誘致、果ては成婚支援まで行っている。沼津市が無作為で抽出した 20 代前半の沼津市民 1000 人の定住に関する意識調査によれば、今後沼津市内で就職・転職・勤務したいと思う理由（複数回答）で最も高い割合を示したのは「家族や友人が沼津周辺にいる」45.6%で、次いで「自宅（実家）から通いやすい」44.4%、「沼津に愛着や関心がある」35.7%の順だった。一方で、今後沼津市内で就職・転職・勤務したくないと思う理由は「楽しいと思えることや場所がない」38.3%が一位で、「自分が勤めたい企業が市内にない」37.7%、「自分が希望する仕事に就けない」29.2%と続き、自分の希望する仕事や就職先がないことに加え、沼津に楽しいと思えることや場所がないという理由が上位を占めている。この意識調査の結果を受け止めるのであれば、勤務面の利便性を除き、若い世代が地域に残るカギは、①つながり続けたい人間関係があること、②地域に愛着や関心があること、③楽しいと思えることがあることとなる。

前出の T 氏も「婚活支援や仕事があるということだけで自分は惹かれない。自分が好きなものがあるからそこに住みたいと思うし、好きであれば長くその土地に居続けるのではないかと話す。

(8) 子どもたちへのアートの提供



(9) 個人の成長とコミュニティの成熟に寄与するアート

子どもたちがアートに触れることによる個人の成長と社会への貢献に関しては数多くの研究成果がある。国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）は芸術教育は個人の認知、感情、心理的成長を促し、創造的な思考と批判精神、対人スキルを向上させ、コミュニティの多様性と持続性に寄与するとし、諸外国の中には芸術教育に力を入れているところも多い。

(10) 保育園の理念と合致するプログラムの提供

スケラボは2018年秋から保育園や障がい児専門の学童保育にアーティストが出向いてワークショップを行うアウトリーチ活動を開始し、保育園や学童保育内のリソースだけでは難しい、良質なアート教育がスケラボによって実現されてきた。子どもたちの様子を見てから保育士や指導者と話し合いながら提供する内容を考えるというオーダーメイドのプログラムは、保育士や教育者から高く評価をされている。

施設のニーズとスケラボの活動が合致した事例として以下保育園のケースを紹介する。

ケース 6: スケラボにアート専門の指導を依頼した「ぼんぽん保育園」

【主なポイント】

スケラボのアウトリーチ活動によって保育園が目指す姿を実現するための活動が可能になった。

- ・沼津市、清水町、静岡市で4つの保育園の経営を行う大澤豊氏は、子どもたちが自分自身と周りを幸せにする力を育むことを目指し、子どもたちにルールを押し付けるのではなく、こどもが様々な体験をし、自ら解決策を導き出すことを大切にしている。
- ・そのためには子どもたちが表現をすること、良質なアートに触れることが重要と考え2018年4月以来スケラボにアート専門の指導を依頼している。
- ・スケラボは一方的に「何をすべき」と決めることはなく、こどもたちを遊んで子どもたちを知ってからプログラムを提案する。そのうえで企画を準備してきても、子どもたちの様子を見て一日遊ぶこともある。子どもたちと同じ目線を持つことで、子どもに必要なものを引きだす。これまでに、スケラボは、子どもたちが創意工夫をして様々な用途で使えるウッドクラフトの箱の制作や、体でいろいろな音を出すワークショップ、子どもたちの四季の写真が貼れる大きな曼陀羅の絵の提供等を行ってきた。
- ・本格的なアートに触れられる機会は地域にはあまり無く、出かけたとしても美術館やコンサート会場等、静かに見ることが前提の場所に限られる。スケラボが地域に出向き、保育園でアートを提供してくれることに大澤氏は感謝をしている。

また、スケラボは中心メンバーのパーカッショニスト、鈴木氏のプロデュースで2019年12月には、スケラボの自主公演としては初となる乳児・子ども向けコンサートを実施した。ステージ上で子ども向け音楽を演奏する一般的な子ども向けコンサートとは異なり、たくさんの打楽器が置かれた幻想的な空間で床に座りながら、イラストの動画とともに小さな楽器音を楽しむ企画だったが、参加者から高い評価を得た。

表3：2019年12月20,21日 乳児・子ども向けコンサート 夜の部参加者アンケート（回収分のみ）

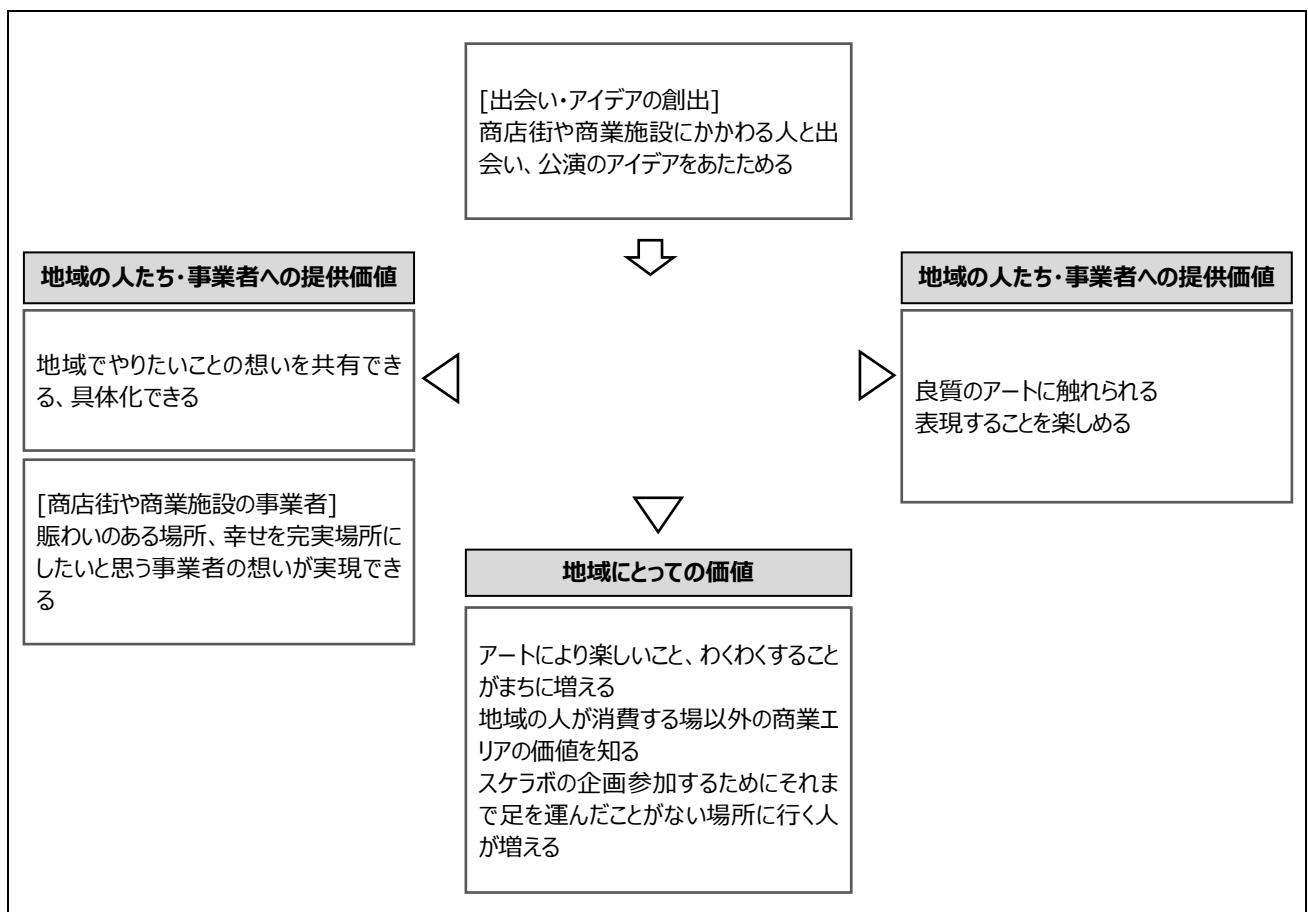
	公演を楽しんだ	アーティストとの対話を 楽しんだ	子どもに体験 させてよかった	また公演を 観たい
そう思う	15	12	12	15
まあまあそう思う	1	4	1	1
あまりそう思わない	0	0	0	0
そう思う思わない	0	0	0	0

自由記述欄

- ・スピーカーを通さない生の音と映像のコラボが素敵でした。孫も聞き入って音の世界を楽しんでいました
- ・子どもが集中して聴いている様子が印象的でした
- ・色々な音を楽しめて良かったです
- ・こういう公演には初めて来ました。面白かったです。子どもも興味深そうにしていました。
- ・小さな子どもが身体で音楽を吸収している感じがした。赤ちゃんがずっと静かにしているのがビックリ！！

- ・色んな音をきけて、子どもにきかせられてよかったです。またこのような機会があれば是非参加したいです
- ・音と映像のコラボがステキでした
- ・楽器にさわらせてもらえて楽しそうでした。普段耳にしない音の中で心地よく過ごせました。
- ・子どもが無意識に触れる音にアーティストが入ることでリズムができ、子ども&アーティストセッションが自然の流れでできたことが印象づけられました
- ・絵を観ながら音楽を聴き、子どもが色々想像しながら楽しんでいる様子で、私も楽しかったです。終わってから楽器に触らせてもらったり、説明を聞いたり良い体験ができました
- ・大きな音が苦手な子なので反応が心配でしたが、とても楽しんでいた良かったです。映像との組み合わせも子どもにとっては飽きることなく良かったと思います。これからもっと音楽のイベントにも連れて行きたいなと思いました
- ・子どもも一緒に楽しめてよかった
- ・普段近くにはない楽器にふれる事ができて、私自身も楽しかったし子どもにも良い刺激になりました。ありがとうございます

(11) まちの賑わいへの寄与



(12) 想いを実現するプロセスを創る

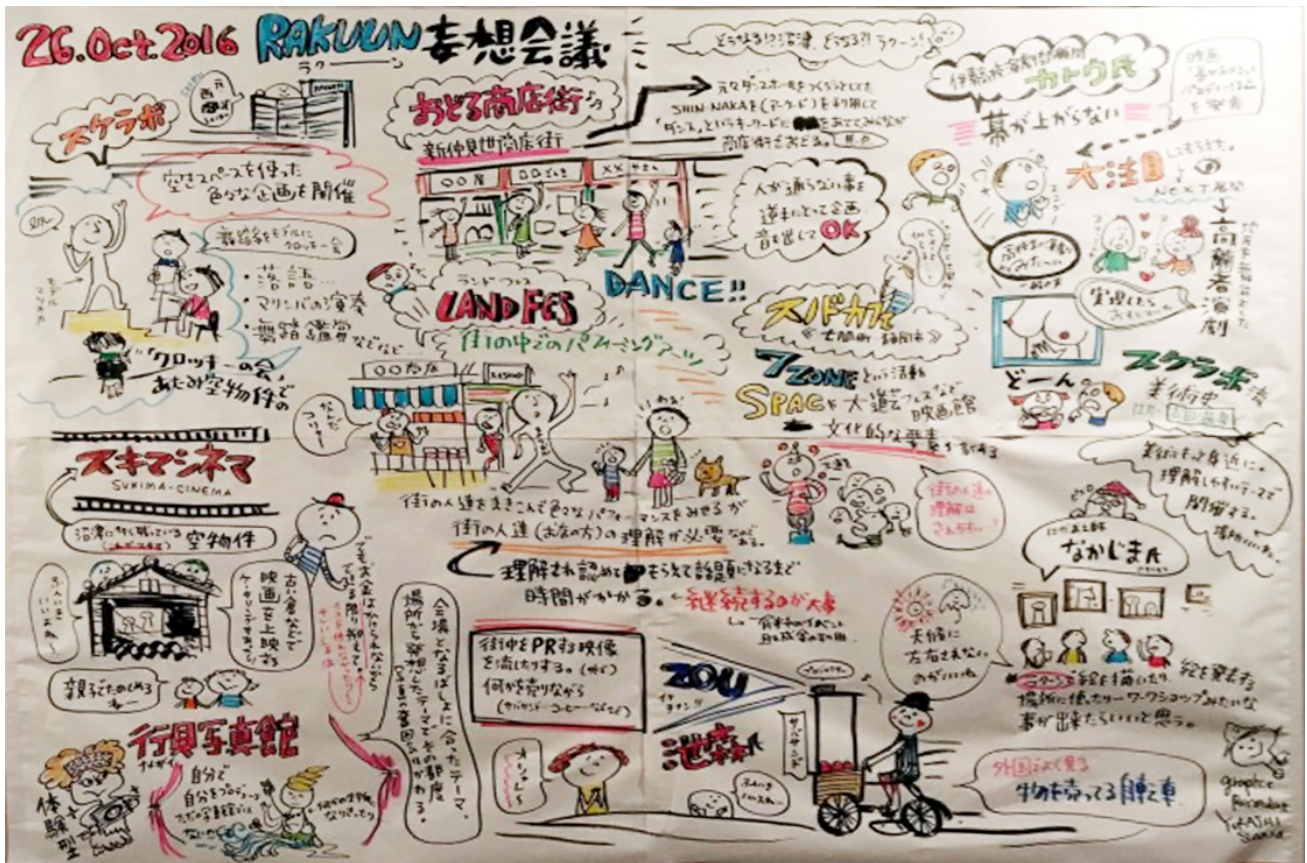
スクラボ発足当初はアートを愛好する人たちを中心とした活動を行っていたが、発足半年から地域においてアートの力で新しいことをしたいと思う人たちとつながる機会として、地域の人が思いを

語る公開プレゼンテーションの機会を設けて行った。公開プレゼンテーションは2016年10月から2019年11月までに「妄想会議」「妄想相談所」等の名前で計14回開催された（表4）。

表4：妄想会議・妄想相談所一覧

イベント名	実施日	会場	開催自治体
ラクーン妄想会議	2016/10/26	沼津 RAKUUN	沼津市
妄想会議@熱海	2017/12/22	naedoco（熱海市）	熱海市
妄想相談所 テーマ：こども目線	2018/8/21	大社の杜みしま	三島市
妄想相談所 テーマ：松崎の未来	2018/8/29	ふれあいとーふや（松崎町）	松崎町
グラフィックレコーディング講座	2018/9/28	沼津 RAKUUN	沼津市
妄想相談所 テーマ：身近さの編集	2018/10/16	大社の杜みしま	三島市
妄想相談所 テーマ：アートで街をどうしたい？	2018/11/2	壺中天の本と珈琲（伊東市）	伊東市
プレゼンテーション講座	2018/11/28	沼津 RAKUUN	沼津市
妄想相談所 テーマ：街の余白	2018/12/15	みしま未来研究所	三島市
-インプロ（即興劇）講座	2019/1/20	沼津 RAKUUN	伊東市
妄想相談所 テーマ：地元を愉しむ	2019/2/16	ジオリア（伊豆市）	伊豆市
妄想相談所 テーマ：誇大妄想大会	2019/3/8	みしま未来研究所	三島市
スケラボチェコツアー報告会	2019/9/23	dilettante cafe（三島市）	三島市
スケラボ相談所 R25	2019/11/7	みしま未来研究所	三島市

図 10：第一回妄想会議（2016 年 10 月）のグラフィック・レコーディング



（記録：スケラボ中心メンバーのサノユカシ氏）

公開プレゼンテーションでは、登壇者が自分ややりたいことを「妄想」として発表し、他の参加者が質問したりコメントしたりする。これによりアイデアがブラッシュアップされ、時には協力者を得られることもある。今までストリートでパフォーマンスを行う「ランドフェス」が沼津駅前の商店街とスケラボのコラボにより実現されたほか、先のケースで登場した演劇人の加藤氏、保育園経営の大澤氏も妄想会議に登壇し、その後スケラボとのコラボを深めていった。

その他移動式ミニシアター「スキマcinema」も実現し、沼津 RAKUUN や、商店街、古民家等で映画上映を行っている。

（13）街の賑わいづくりへの寄与

スケラボが主な公演場所とする沼津 RAKUUN が、スケラボと施設管理者の手によって、地域の文化芸術資源として開発されたことは先に述べたが、この背景には沼津駅前の賑わいを創りたいと考える施設管理者の思いがあった。施設管理の E 氏は、場所を提供することは短期的な経済的収益こそ生み出さないが、別の点で大きな価値があると次のように話す。

パチンコ、飲食店、お笑い劇場、カラオケ店、キッズランドが入る沼津 RAKUUN は駅前にあり、地域の多くの人にとって、名前も場所も知っているが、行ったことない場所である。

商業施設はその地域が元気じゃないと成立しない。沼津 RAKUUN を含めた駅前地域は、人が行き交う場所にならなければならないし、沼津駅前で館を構えている以上、周辺の商店街も含めて「あの辺で面

白いことやっている」というようにしたい。

スケラボやスキマ cinema の企画によって、それまで RAKUUN に足を運んだことの無い層が訪れるようになった。年齢幅が広く、おとなが思いっきり楽しんでいることを若者に間近で見せられることもできている。

スケラボの取り組みは新聞にも取り上げられ、こちらが販売促進の予算を使わずに RAKUUN のことを知ってもらえる。

商業施設は消費するだけの場所ではない。経済的なものと、文化的なものを、気軽にクロスオーバーしていきたいと思っている。

E 氏は商業施設にとって消費だけではない、別の目的で人が訪れるようになること、人が行き交う場所になることが、イベント毎の収益だけで測れない価値があるとしている。同様の考えは、スケラボが商業施設内を練り歩く「ENGI-MON」の公演をした清水町のショッピングモール「サントムーン柿田川」の運営者、N 氏からも述べられた。

サントムーン柿田川は、モノとお金の交換だけでなく、地域とつながり、幸せを創発する場所になることを目指している。

ひとつひとつアートイベント開催を続けていくと、売りに換算されない価値が積み上げられていく。モノが増えたり減ったりの一喜一憂ではなく、興味関心の連鎖で新しい世界が広がる。

スケラボの「ENGI-MON」が店内を歩くと、はじめはびっくりして遠巻きに見ていた買い物客も最後は一緒に踊っていたのには驚いた。スケラボのアートは観客が見るだけではなく、参加することのできる「関わり代（しろ）」が大きく、幸せの創発というサントムーンのコンセプトに合致している。

その後サントムーンでは新年のイベントや新館の開館に合わせてスケラボに制作やパフォーマンスを依頼している。

5. 価値を生み出した貢献要素

スケラボの評価情報を分析していくなかで、スケラボが地域に変化をもたらした価値を生み出した理由がステークホルダーのインタビューで触れられていた。本章ではスケラボの価値創造を可能にした貢献要素についてステークホルダーへのインタビューを中心に抽出する。

アートを楽しむことを何よりも大切にする姿勢

「まず僕ら自身が『すごく楽しいことやっているぜ』といつも思い、そこにいろいろな人が呼応していくことが大事。強制ではなく、そこに乗っていきやすいしかけを創る。」

「いつだって楽しい時間をつくれるし、自分で楽しみを見つけられたら良い。そういう思考ができるお手伝いができたらと思っている。」—スケラボ代表・川上氏

スケラボはアートで地域の人が楽しむことを何よりも大切にしている。小さな子どもを対象にするイベントを開催することが決まれば、その対象のことをアーティストたちが深く考えてオーダーメイドの企画を練る、商店街の公演であれば、その空間を利用したパフォーマンスを展開する。

このように、その対象、その場に合った新しいアートの企画を徹底的に考える、良質なアートを体験する機会を提供することにより、結果として観客による公演自体の高い評価につながる。また参加者が手を動かすワークショップでは、技術を高めたり、画一的な成果物を作ったりすることを目的とせず、参加者が作品を作る過程を楽しむことを重視し、講師はその過程をサポートする。何かの手段としてアートを「活用」するのではなく、専門性の高いアーティストたちが、純粹に地域にアートを提供することを追求していくことで、参加者は普段の生活の質を上げ、また、地域の価値を発見するなど、様々な価値創出に寄与した。

「アートを提供する側」「される側」の境目を無くす試み

「通常の劇場であれば、観客は決まった席に座り、公演中は静かに集中して観ることを求められる。スケラボが既存の劇場ではないところで公演をすることを魅力に感じる。絵画は美術館で見るもの、ステージ公演は劇場で見るものという思い込みがあったが、スケラボを見て、どんな場所だって音楽ができるし、ダンスもできるし、演劇もできるし、そこにいる人が一体となって皆で楽しめると今では思っている。またお客さんかと思いきや、どこかのポイントで、アートを提供する側になることもある。」—中心メンバーに 辻村氏

スケラボは「アートを提供する側」「される側」の境目を無くし、そこにいる人たちが主体的に関与することを目指している。ショッピングモールの公演では、買い物客が踊りだし、チェコ共和国のアートフェスティバルでは国籍や年齢を超えた観客数百人が一体となって踊り、最後お互いがハイタッチをするような場を創りだしてきた。

スケラボの公演でも演者と観客の物理的な境を感じさせない空間利用が行われ、演者や制作側と観客と語らう行うアフタートークも公演の一部として双方が楽しむほか、スケラボの中心メンバー自身、出会った人たちの想いを聞き、対話をするを大切にしてきた。

こうした姿勢により人同士の距離が狭まり、観客として訪れた人のなかから、イベントの手伝いをしたり、広報に協力したり、中には中心メンバーになったり、というように、豊かな社会関係資本が築かれていった。

共創を促進するリーダーシップと中心メンバーが共有する価値観

「大二郎さん（川上氏）がアートをかかわる仕事をしながら演者ではなく、舞台監督であることが大きい。」—中心メンバーの鈴木氏

「スケラボはグループで活動しているが、ひとりひとりの考え方は独立している。こうしたつながりで新しいものを生み出し続けられるのは、スケラボはメンバーの见ている方向が同じだからではないか。スケラボと話したわけではないが、私がスケラボから受け取っているメッセージは『自分のなかのアーティスト性を忘れないでくれ。もっとアートは身近なんだよ』ということ。」—スケラボを支援する山崎氏

長年舞台監督を仕事としてきた川上氏は、チームで作品を創り上げてきた。良いものをつくっていくために言われたことだけをやるのではなく、ひとりひとりができることを考えることが重要であ

ると同時に、チームメンバーが本音を言える環境をつくるリーダーシップが必要と考えてきた。スケラボでも各企画は中心メンバーがプロデュースを務めることも多く、どう企画を発展させていくかは各々に任されている。一方で、良質なアートを届けるために、各中心メンバーがマネジメントや渉外、広報、記録等、それぞれの役割を合わせて力を合わせている。

また、スケラボのビジョンやミッションや明文化されてはいないものの、中心メンバー及び山崎氏のようにスケラボの活動を近くで支える人たちの間でスケラボが大事にしてきた想いやアートや地域に向き合う姿勢が共有されていることがインタビューから伺えた。それぞれの力を引きだすリーダーシップと、共有する価値観が多様な人たちの協働を可能にしていると考えられる。

地域の人脈の豊かさ

「地元で暮らしているからこそ会って話せることが大きい。」—スケラボの中心メンバーの住麻紀氏

スケラボの中心メンバーの多くは静岡東部在住または出身であり、スケラボと出会う前から地元の人たちとのつながりを持っている。例えば中心メンバーの一人、住氏は三島市の佐野美術館の学芸員を務めた後に、三島市の委託を受けて地域のアートを紹介する仕事をしたり、フリーランスのアーティストの集まりに参加したりしてアートにかかわるひととのつながりを構築していた。さらに、出産後、平日日中に地域で過ごす時間が長くなったことで、異業種でありながら自由な発想で地域で取り組みを行っている人との人脈を築いていた。

アーティストに限らず、地域で様々な取り組みをしている人、またしたいと思っている人を招いて行った公開プレゼンは、住氏をはじめとするメンバーの豊富な地元の人脈と積極的な声かけによって実現した。

地域のつながりを通じて、様々な取り組みとアートを融合させていく活動は、外部から一時的の地域を訪問する団体にはできない。スケラボだからこそ、地域の人たちとの協働による企画を生み出し、また公演会場を飛び出して保育園や学童保育、学校など地域の中に出向いて活動することができているといえる。

6.今後に向けて

4章「評価結果」で概観した通り、スケラボ自身が意図していなかった変化も含めて様々な価値が生み出されていた。

スケラボは友人関係を起点とし、その後口コミを中心として観客やサポーターとしてかかわる人のつながりを増やしていった。このつながりはスケラボの財産であり、これからも維持し関係性を発展させていくことも大事であるが、今後スケラボのファンやサポーター層を厚くしたり、新たな協働先を開拓したりするのであれば、まだコンタクトが無い「コールド・マーケット」にもアプローチしていくことも必要かもしれない。

そこで本章では、今まで築き上げた関係やスケラボの生み出した価値を基盤として、新しいつながりを得ていき、ひいては地域でスケラボの活動を求める人を増やしていく方策について検討する。

■スケラボの生み出す価値の発信

観客が高く評価するスケラボのアートそのものの価値に加えて、本評価ではスケラボが個人や地域に対して与える様々な価値が抽出された。スケラボの活動そのものに加えてこれらの価値と併せて、アウトリーチやストリートでの公演等、価値を生み出すために提供できる活動メニューを発信していくことで、地域でニーズを持つ人たちとの協働につながる可能性が増すかもしれない。発信先としては、今まで関係を築いてきた地域の方々に加え、アウトリーチの潜在的ターゲット（学校、保育園等）、行政、企業等からニーズを持つ可能性のあるところを見出して個別の働きかけをしたり、地元紙を通じて広い層に伝えたりといったことが考えられる。

■公演を軸に協力者を獲得

スケラボの自主公演を行う準備のなかで、地域の協力者を募り、それぞれができることを実施してもらうという過程を含めることで、その後も続く協力関係を築けるかもしれない。例えば、公演を行う際には自治体の後援名義をとり、市の広報誌で宣伝をしてもらう、駅前商店街の協賛を得てチラシの配布やポスターの掲示を依頼し、イベント時には商店街の広報物を配るような互酬性のある方法を提案する等、様々なメニューを用意する等、実現可能な方法について地元の事業者と意見交換しながらメニューを提示していくことについては一考の価値がある。

付録.評価実施概要

■評価実施期間

2019 年 11 月 評価設計

2019 年 9 月～3 月 評価情報の収集と分析

2020 年 3 月～4 月 評価報告書作成

■評価情報の収集

本評価は、主として下記の情報源に対するヒアリング、これら情報源から提供を受けた資料とアンケートへの回答、イベントの参与観察を元に行っている。

【本評価のための主な情報提供者】

- (1) Scale Laboratory （インタビュー、資料提供）
- (2) Scale Laboratory 協働者・サポーター （インタビュー）
- (3) Scale Laboratory 公演参加者（アンケート）

■評価者と本評価の問い合わせ先

インクルラボ 代表 高橋聖子
kiyokicat@gmail.com